
流星のロックマン 連鎖する運命

冬の結晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン 連鎖する運命

【Zコード】

N4263W

【作者名】

冬の結晶

【あらすじ】

メテオGの事件から数ヶ月後、スバル達は6年生になり平穏な
生活を送っていた。そんな中FM星では、アンドロメダの鍵の設計
図を盗み再び地球侵略を企むFM星人達が、地球に向かってきて
いた。陰で糸を引く者達から、スバル達は地球を守ることが出来るだ
ろうか？

プロローグ

- ? ? ? -

カタカタ・・・暗闇の中キーボードを打つ音が部屋に響く。影が画面と向き合いキー ボードを叩いている。音は休むことなく続いた。そんな中ドアが開き暗闇の中に光が差し込んだ。

「こんな遅くまで計画の確認？ 体調崩すよ？」

ドアから入ってきた人物は、キーボードを叩いている影に言った。
「・・・計画の最終確認だ。そつちこそこんな遅くまで起きていたら体調崩すぞ。」

影はそう言いながら手を止めた。

「最終確認つて『核』を集めるだけじゃなかつた？」

「ただけど・・・失敗は出来ないからな。それより例の件つまくいつたか？」

「バツチリだよ。うまくいった」

「分かった。俺はもう少し起きとくけど、お前はもつ寝ろよ

ドアから入ってきた人物は、「分かった。無茶はするなよ」というと外に行つた。

部屋に残つた影は、再びキーボードを叩き始めた。

- FM星 -

現在時間は午前零時。ここに住むFM星の人々も寝ているようで電波体の気配がほとんどない。そんな中FM宮殿では、警報が鳴り響いていた。

「なに」とだ

緑色の電波体が現れた。彼の名前はケフェウス。FM星の王であり、かつて地球侵略を企んだ。しかし、その戦いでスバルと出会い絆の大切さを知った。今は過去の罪を償うために過去に滅ぼしたAM星の復興を手伝っている。

宮殿の扉が開き一人の兵士が入ってきた。

「大変ですケフェウス様。FM星人の数名が、アンドロメダの鍵の設計図を盗み地球に向かっています。」

「何、地球との連絡は？」

「電波がジャミングされていて連絡が出来ません。」

報告を聞くとケフェウスは、宮殿の出入口へと足を運んだ。

「ケフェウス様どちらへ」

「地球の民達にここのことを行えに行く。」

「…ダメですケフェウス様。今あなたがFM星を離れては、FM星の民達の信頼をなくしてしまいます。どうかここにしてください。」

「

「我々も同じ意見ですFM王」

突然後ろから声が聞こえたため反射的にケフェウスは振り向いた。そこには、AM星の三賢者ペガサス・レオ・ドラゴンがいた。兵士は三賢者を見ると一礼をして外に出て行つた。

「地球には、すでに我々の使者が向かっています。」

「ですからFM王は、ここを離れずするべき」としてください。」

「

ケフェウスは、「…分かった」といつて承諾した。

「…お主達も離れるわけにわいかないのか?」

「はい、AM星の復興が忙しいため我々も離れるわけにはいきません。しかし、大丈夫でしょう。地球には、星河スバル達がいます。彼らならやつてくれるでしょう。」

ケフェウスは「そうだな」といった。しかし、そこにいた四体の電波体は嫌な胸騒ぎを感じていた。

プロローグ（後書き）

初投稿のうえ僕は国語能力が欠けているため、いろいろおかしなところがあると思いますが、これからがんばっていこうと思います。
感想・アドバイス等お願いします

いつもの朝

・ ハダマタウン・

現在AM8：10 ある青い屋根の家で、叫び声が聞こえる。

「いい加減起きろ————！」

「あ～もう、うるさいよ。ウォーロック」

「何がうるさいだ。今何時だと思つてやがる」

「ん～えっと・・・・・・」

布団の中にいた少年は、近くにあつた時計を見るなり飛び起きた。
「8時過ぎてるよー！ウォーロック何で起こしてくれなかつたの！？
？遅刻するーー！」

「俺がお前を起こすために何回叫んだと思つてるんだよーーー！」

少年は学校の準備をすると部屋を出て階段を降りて行つた。

彼の名前は星河スバル。彼はロックマンになつて、『FM星人』
『地球侵略』『ムー大陸の事件』『メテオGの事件』の三つの大きな
事件を解決し地球を救つた英雄である。他にも平行世界でアポロン
フレイムとブラックホールサーバーでシリウスと戦つている。

朝スバルを起こそうとしたのが、スバルの相棒であるウォーロック。彼は元AM星人だったが、今はスバルのウイザードとして生活している。スバルと電波変換することで、シューティングスター口ツクマンになれる。

「おはよ、母さん」

「おはよ、スバル。朝食は机の上にあるから速く食べなさい。ルナちゃんたちたち来てるわよ。」

彼女は星河あかね。スバルの母親で、優しく料理が得意。

「あれ、父さんは？」

「大吾さんならもう仕事に行つたわよ」

星河大吾。スバルの父親で、行方不明だったがメテオGの事件後、ウォーロックと共に地球に戻ってきた。今はWAXAで働いている。

スバルは異常な速さで朝食を食べた。

「『』馳走さま」

その後、荷物を持って玄関に向かった。

「行つてきます」「いつてらつしゃい」の会話を交わすとドアを開け外に飛び出た。

「あつそーい！今何時だと思つているのー？」

「じゃめんなさいー・委員長」

スバルが謝った彼女の名前は白金ルナ。高飛車な面がある。ウィザードはモードで礼儀正しい。

「おっせーぞ。スバル」

「ゴンタ君が言えること」とではないと思しますよ。」

「うう・・・」

牛島ゴンタ。単調だが喧嘩には強い。ウィザードは元F.M星人のオックス。電波変換でオックスフヤイアになれる。

メガネを掛けた背の低い彼は、最小院キザマロ。ウィザードは計算が得意なペティア。

「とにかく、時間がないわ。走るわよ」

ルナを先頭に四人は学校へ走り出した。

いつもの朝（後書き）

感想・アドバイス等待つてます。

転校生（前書き）

「プロローグ」と「いつもの朝」を編集しました。
注意、アドバイスありがとうございました。

転校生

—コダマ小学校—

あれから全力で走った結果時間ギリギリで間に合った。

「ギリギリセーフ。疲れた！」

「誰のせい？」うなつたのかしら？」

ルナがオーラを放ちながら聞いてきた。

「（ま、まよい・・・、コンタ、キザマ口助けて！）」

スバルが一人に視線を送るが、とばっちりをくらわないようにするため二人は視線をはずし授業の準備をしていた。スバルが長い説教を覚悟したとき、教室のドアが開き先生が「ホームルームを始めるぞ、みんな席につけ」といいながら入ってきた。

ルナは「次からは速く起きるように」といつて席に着いた。スバルは「（助かつた）」意外何も思っていなかつた。

「よし、みんな席に着いたな。今日は知っている人もいると思うが転校生が来るぞ。」

周りを見ると確かに席が四つ空いていた。周囲が騒がしくなり「どんな子が来るんだろ」「楽しみだね」などのお決まりの会話が聞こえてきた。

「まあ、みんながよく知っている人たちだからすぐに仲良く出来るだろう。じゃ、入つてくれ」

先生がそういうと教室のドアが開き二人の転校生が入ってきた。転校生を見るなりクラスのみんなは、言葉を失った。なぜならその転校生は・・・・・

「双葉ツカサです。みんな久し振り、のぼうが会つてるのかな?」

「ジャックだ。元気にしてたか」

「ベイサイドシティーから転校してきた響ミソラです。よろしくお願いします。で、いいのかな?」

双葉ツカサ。幼い頃、親に捨てられたため、親への憎しみが大きくなつた。その結果もう一つの人格ヒカルが生まれた。FM星人侵略のとき、FM王の右腕ジムニーと電波変換してジェミニースパークになりFM星の最終兵器アンドロメダを復活させた。しかし、スバルに阻止され、スバルと接することで親への憎しみが薄れていきヒカルと向き合つて生きていくため、和解の旅に出でいた。

ジャック。ディーラーの元幹部で、キングのメテオG計画を手伝つていたが、その計画を利用しメテオGを地球にぶつけようとするが、スバルに止められた。今は罪を償うためにWAXAで働いている。

響ミソラ。幼い頃父親を事故で、母親を病氣で亡くしつらい日常を送つっていた。しかし、スバルと出會つことでつらかつた日常が変わつていった。国民的歌手で、スバルの始めてのブラザー。ウイザードは元FM星人のハープで、電波変換することでハープノートに

なれる。

「あと一人いるんだが、用事ができたらしくてあえるのは明日になるな。さあて、三人はどこの席がいいかな？」

先生が言つたとたん教室の男子（スバル以外）が人気アイドルのミソラを自分の隣にしようとあちこちから「ミソラちゃんは僕の隣に」と言ひ声が聞こえ始めた。

「ツカサ君、ジャック！」窓に立てるけど、どう？』

男子生徒がミソラを自分の隣にしようとがんばっている中、スバルはツカサとジャックに声を掛けた。そんな中、ミソラが希望を言った。

「先生、私スバル君の隣がいいです。」

「うーん、星河はいいか？」

「え、いいんですけど・・・」

その瞬間クラスの男子（ツカサ、ジャック以外）から、殺氣のこもつた視線を向けられた。ルナはそれに加えて不気味（嫉妬？）なオーラを放っていた。

「（・・・なんかみんなからの視線が痛いし、委員長がすごい怖いんだけど）」

そんな空氣を気にせずミソラがスバルの隣の席に来ていた。

「これからようじくね。スバル君」

「へ、うそ。」「ちがうよ。」
「スバルはさうに殺氣のこもった視線を向けられていた。

「響の席は決まったな。ツカサとジャックはどうがいいか？」

「僕はどこでもいいです。」

「俺もどこでもいいぜ」

先生が一人の席を決めた後、今日の予定を言うと「よ～し、これでホームルーム終了。みんな授業の準備しとけよ」と言うと教室から出て行った。授業の準備が終わるとスバル、ミソラ、ルナ、ゴンタ、キザマロ、ツカサ、ジャックの七人の雑談が始まった。

「ツカサ君帰ってきてたんだね」

「うん、一週間ぐらい前に戻ってきたかな」

「それにしても驚きましたよ。転校生がツカサ君にジャック君、ミソラちゃんだったとわ

「本当よ、三人とも何の連絡もなしに来るんだから

「それよりも、ジャックやミソラちゃんは何でコダマ小に転校して来たんだ?」

「俺は曉に『お前はまだ小学生だから学校に行け』って言われて、強制的にこしをされた。」

「私は勉強を長じに間ほとんどやつてなかつたから、そろそろ勉強しないといけないかなと思つて転校してきたんだよ。」

「あれ、ミソラちゃんってベイサイドシティーの学校に通つてたんだから無理に転校しなくてもよかつたんじやないの？」

「そりゃええばそりゃね、何か理由があるの？」「ソラちゃん

「え、ええ～と・・スバル君やみんながいるからだよ。」

ミソラは答える間少しへスバルを見た。それにきずいたツカサはミソラとスバルを見てくすくすと小さく笑つていて、ルナは再び不気味なオーラを放つてゐる。他の四人は話に夢中できずいていない。

「（・・なんか委員長が怖いんだけど、なんかやつたかな）」

「でも、学校に行き始めたら仕事がやつづくなるんじゃないのか？」

？」

「ツカサ君の言つとおりなんだよね。だから、次のライブが終わつたらじぱりへの聞仕事を休むつもりなんだ」

「ええ、じゃあミソラちゃん歌手やめたりうのかよ」

「じゅうべの聞つて聞いたでしょ。」

「じゃあ、みんなでミソラちゃんのライブに行かない？」

スバルの提案にほとんど全員賛成したが・・

「俺はいかねえぞ、騒がしいところ嫌いだから」

「だめよ、ミンラちゃんの引退ライブなんだから拒否権ないわよ」
ルナの言葉にいいかえそうとしたが、後がうるさいのでしぶしぶ承諾した。

「とこりとこりで、全員行けるぞうよ。」

「分かった。全員分のチケット取つとくね」

そんな会話をしているとクラスの男子がスバルを呼んだ。スバルは「（何だり）」と思いつながら行くと、スバルの周りを囲んだ。

「え、な何？」

「お前//ソリちゃんどうつ関係なんだ？」

「え、ブロガーだけど・・」

「なんだとー詳しく述べもりおつか、スバル？」

「（な、なんかみんなの目が怖いんだけど・・）」

助けてもらおうとみんなのまつに視線を送るが、ライブの話に夢中で誰も気がついていない。クラスの男子による尋問（？）が始まるとしたとき、再び教室のドアが開き先生が「おーい、なにして

る。授業始めるや〜〜」と言いながらはいってきた。スバルを囲んでいた男子は悔しそうに席に着いた。

「（た、助かった・・なんだか今日は良い一日でもあって、ひどい一日だな）」

スバルはそう思いながら席に座り、授業が始まった。

転校生（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

大量発生（前書き）

投稿遅れてしましました。これから気をつけようと思います。では、どうぞ。

大量発生

- 屋上 -

今ここには僕^{スバル}とウイザードのウォーロックしかない。え? どうしてかだつてそれは・・

みんなが昼食を食べ終わると、ミソラがコダマ小に転向してきたことをかぎつけたファンの人でクラスの中がいっぱいになった。ツカサとジャックも「今まで何していたんだ?」などと質問される。委員長たち三人は教室にきたミソラのファンの対処で忙しいようだ。スバルは教室にいるとクラスの男子にいろいろ問い合わせられ、そのうえ誰もいないと思われる屋上にいる。

そんな訳で屋上に来たスバルは芝生の生えたところに座つて空を見上げていた。

「にしてもツカサ君やジャック、ミソラちゃんが転校して来るなんて驚いたね。」

「俺にとつてはいい迷惑だけどな」

「え、なんで?」

「ハープのやつがいるだろ」

「・・何でウォーロックは、ハープが苦手なの?」

「前にいろいろあつてな」

「ふうん

スバルはそういって話を止めて再び空を見上げた。

「・・・なあ、スバル」

「うん? 何、ウォーロック?」

「暇だ〜何か事件とか起きないかな〜」

「暇ならハープの所に行けば?」

「いや、それは無理。それよりウイルスとかをぶっ倒すほうが良い。」

「え〜、僕は嫌だよ。戦つたりするの。それに、それに事件なんてそう簡単に起きないよ。」

スバルはウォーロック意見にそりと答えるとまた空を見上げた。

「・・・事件起きる」

「え?」

「事件起きる、何でもいいから事件起きる・・・」

「ちよつとウォーロック、物騒なこと言わないでよ。それにそん

な」と言つたつて事件が起きるわけが

そのとき町に爆発音がなつた。

「お、 おいスバルウイルスが大量に出てきたぞ」

「ウォーロックがあなことを行つてたからだよ」

「俺のせいにするなよ。 それより、 速く行かなくていいのか?」

「もう、 行くよウォーロック。 電波変換」

そういうとスバルはロックマンの姿になり、 ウェーブロードに乗つてウイルスがいるところに向かつていった。

「ウェーブロードー

「スバル君」

スバルがウェーブロードで移動していると後ろから声を掛けられた。 そこには、 ハープノートがいた。

「ミソラちゃん、 どうして」

「教室でみんなと話していると、 外から爆発音がきこえてハープがウイルスが出たつて言つたから急いできたの。 それから・・・

「スバル（君）」

声がした方を見るとジエミースパークとジャックコーヴァスも来ていた。

「ツカサ君、ジャックそれにヒカルも、三人ともどうして電波変換ができるの？」

「その話はまた後で、それより」

「おい何話してんだ。さつさと行つてかたづけるぞ」

「う、うん。行こ。」

五人は、ウエーブロードを使い現地に移動し始めた。

-コダマ公園-

「うわ

「な、なにこれ

四人の目の前には、百体をゆうに超えるウイルスの大群が暴れていた。

「どうあずさつと終わらせよっぜ」

「久し振りに暴れるぜ

「ヒカル、ほどほどにね」

五人は手分けしてウイルスを倒し始めた。

「ブレイクサーべル」

「パルスソング」

「フェザーシックル」

「Hレキソード」

「ロケットナックル」

五人の攻撃によりウイルスの大群は減る・・はずだつた。

「ねえ、もうずいぶんウイルスを倒したよね。」

「うん、でも」

「数が減つてないね」

「逆に増えてきてるな」

「ねえ、それになんかウイルスの動きが速くなつてきてない」

「僕もミソラちゃんの言つてるとおりだと思つ」

「そう、ウイルスの動きが速くなり当たつていた攻撃が少しずつ当たらなくなつてきた。」

「...ミソラ後ろ」

ミソラが目の前のウイルスを倒すと残っていたウイルスがミソラを後ろから攻撃しようとしていた。しかし、そのウイルスが突然真っ一つになりテリー一トされた。

「ミソラ、大丈夫？」

「うん。大丈夫だよハープ。ありがとうヒカル君」

「口を動かす暇があつたら手を動かせ」

「いくらなんでも数が多くすぎる」

このままだと、体力が減つていくスバルたちが不利なのは明らかだ。スバルは広範囲攻撃のバトルチップを使うが、ウイルスたちは一向に減る様子がない。

「！おい、スバル。何か変な周波数があるぞ」

「え、ウォーロック場所は？」

「目の前のウイルスの中だ」

「分かつた。ソードファイター」

バトルチップを使いウイルスを倒すが、残ったウイルスが邪魔をしてスバルの行く手を遮っている。

「どうしよう、これじゃ何があるのかが分からない」

「スバル、少し離れてろ」

声が聞こえたほうを見るとジャックが空にいて両手からは紫色の炎が出ていた。スバルはジャックのすることが分かると上にあったウォープロードに移動した。

「ペインヘルフレイム」

すると無数の炎がウォーロックの言った場所にいたウイルスを半分以上燃えた。燃えている炎の中からは奇妙な光を放つ装置が現れた。その装置の周りを中心に焼き払ったウイルスが出現していた。

「あれは！」

「どうやらあの装置を壊さないとこのウイルスは消えてくれないみたいだね。」

「そうみたいだね。行くよツカサ君、インパクトキヤノン」

「ロケットナックル」

二人の攻撃は装置にあたり音を立てて壊れた。装置が壊れた瞬間ウイルスたちの動きが始めの速さに戻った。

「すべてあの装置のせいだったってわけか」

「そうみたいだね。けど、もう増えることはない」

「よーし、ショックノート」

「ジエミー・サンダー」

「ペインヘルフレイム」

「ジャイアントアックス」

スバルたち五人の一斉攻撃でさつきまで減ることのなかつたウイルスがほとんど消えていった。残りのウイルスをかたづけるのにそんなに時間は掛からなかつた。ウイルスがかたずくとスバルたちは電波変換を解いた。

「やつと終わつた」

「さすがに疲れたね」

「俺とツカサがいなかつたらお前らやられてたな。」

「そりいえば気になつてたんだけど、なんで一人は電波変換が出来るの? ジエミーとゴヴァースがいないのに」

「それはね」

スバルの質問にツカサが答えようとしたとき、スバルのハンターが鳴つた。

「スバル電話だ」

「分かつた。ありがとう、ウォーロック」

スバルはウォーロックにお礼を言つと「誰だれ?」と思いながら

ハンターを操作してエアティスプレイを出した。そこにいた人物は・・・

「ひさしぶりね。スバルちゃん」

「ヨイリー博士」

ヨイリー博士。WAXAの科学者。メテオGの一件で、スバルに力を貸してくれた人だ。

「あ、おひさしぶりです。ヨイリー博士」

「ひさしぶりね、博士」

「あら、ミソラちゃん」「ハープちゃんひさしぶり。二人とも元気にしてた?」

「はい、元気にしてます」

「そうよかつたわ」

「ところで博士、何かあつたんですか?」

「ええ、ちょっとそっちで妙な周波数を感じしてね。そっちで何か起きてない?」

「つこつこ今までウイルスが大量に発生していました。」

「もう、俺たちが倒したけどな」

「そう、そのことでちょっと話があるから、そうね、学校が終わったらWAXAに来られる?」

「あ、学校があつたの忘れてた。」

「あ、私も」

「じゃあ、まず学校に戻つて、話はWAXAでつてことになるね」

「そうだね。学校が終わつたらWAXAに行かせてもらいます。」

「ええ、分かつたわ」

マイリー博士はそつそつと電話を切つた。

「学校に戻るわぜ」

「うん」

四人は再び電波変換をして学校に向かつた。

大量発生（後書き）

戦闘描写を書いて見ました。
アドバイス、感想等よろしくお願いします。

じゅりあ

- ロダマ小学校 -

「よーし、ホームルーム終了。気をつけて帰れよ」と言つと先生は教室から出て行つた。

あれからヨイリー博士と話し終わり、スバル達が学校に戻ると六時間目の授業が始まっていた。なぜいなかつたのかと理由を聞かれて素直に「電波変換してウイルスを倒していました」なんて言えるわけがないため、「保健室に行ってました」などと適当な理由を言つて授業に参加した。

「で、スバル君たちは、私たちに向も言わずに戦いに行つたってことね

「はい、そうです

今は教室でさつきのウイルス戦のことをルナ、ゴンタ、キザマロに説明していた。

「それで、今からWAXAに行くの？」

「うん、ヨイリー博士に学校が終わったら行くって言つてあるから

「分かったわ。ゴンタ、キザマロ、私たちもWAXAに行くわよ

「

「え、委員長たちも来るの？」

「当たり前でしょう。それにゴンタだって電波変換できるんだから私たちも話して参加させてもらひつわよ

「そうですよスバル君。僕たちもついていきますよ。そうですよね、ゴンタ君

「え、ああ、そうだぜスバル」

ゴンタは、何か考え事をしていたので、キザマロに声を掛けられたとき少し驚いていた。

「ねえ、スバル君。速く学校を出ないと出られなくなるよ

「？ 何で、ツカサ君

「スバル、あれを見てみる」

ジャックが外を指したので見てみると、そこには大勢の人があの前にいた。

「・・なんなの、あれ」

「多分ミソラちゃんのファンの人たちじゃないの」

「ミソラちゃんってすじいね」

「そんなこと言つてる場合ですか、あれじゃWAXAまで行くの

に時間が掛かりますよ

「あそこでいる人たちとは、ミソラのファンなんだろ」

「多分そうだろうね、それがどうかしたのジャック」

「それなら、ミソラが電波変換してWAXAに行けばいいんじゃねえの？」

「確かにそうね、それでいかじらミソラちゃん」

「うーん、それだつたらスバル君も一緒に行こうよ」

「ちょっと待ちなさい。何でスバル君もなのよ」

「だって、みんなは一緒に行つて私だけ一人で行くのって嫌なんだもん」

「僕は別にいいけど」

「本当?スバル君。じゃあ速く行こう

そういうとミソラはスバルを引っ張つて教室を出て行った。そのさい、ミソラと一緒にいるスバルを目撃した男性陣が「スバル、何してやがる」などと叫びながら一人の後を追つていった。

「ミソラちゃん教室出るの速かつたな

「スバル君逃げきますかね」

「スバル君も大変だね」

「なあ、委員長のやうのがマジで怖いんだが、何とかしてくれないか？」

ジャックの隣には話しかけただけで怒りそうなルナがいた。

「ううん、多分無理。ウェーブライナーに遅るといけないから先に駅行っておくね。」

ツカサは笑顔で言つと教室を出て行つた。残された三人はルナに声を掛けるが「何？」と恐ろしい目で見られたが、「駅に行きますよ」というとツカサの後を追つていつた。ルナは、自分が置いていかれたことにきずきさらりに機嫌が悪くなつていた。

— ウエーブロード —

「はあ～疲れた」

「大丈夫？スバル君」

教室を出た後スバル達を追いかけてきた男性陣たちから逃げるため、全速力で走り何とか逃げ切つた。今は電波変換してウェーブロードにいる。

「それにしてもすごい人数だったね。スバル君って人気者なんだね」

「いや、僕じゃなくてミソラちゃんだと思うよ」

ミソラはスバルの言つた事が聞こえてないようでウホーブロードのつえを歩いている。

「どうしたのスバル君。おいでいくよ」

「あ、まつてよミソラちゃん」

スバルはミソラのところまで走つていった。それから少しの間二人はWAXAに向かつて歩いた。

「それにしてもこうしてスバル君と一人でいるのって久し振りだね」

「そういえばそうだね」

「ああ、なにいつてんだ、俺も・・グハ！」

ウォーロックがウイザードオンして出てきたところをハープが一発KOにしてしまった。気を失つたウォーロックをハープが「ごめんなさいね。このガサツは私が預かつておくわ」と言いながらウォーロックを引きずつてどこかに行つてしまつた。

「ウォーロック、大丈夫かな?」

「大丈夫なんぢゃない、それよりスバル君もう少しうつくり行くない?」

「え、いいけど」

スバルはそういうとペースを落とした。それから一人はWAXAまで楽しそうに会話をしながら向かった。

「WAXA前」

WAXAの前に青とピンク色の一人の電波体が現れた。一人は電波変換を解き周りを見渡した。

「みんなまだ来てないみたいだね」

「そうみたいだね」

スバルとミソラがルナたちより先についたようだ。（当たり前だが）

「あ、スバル君来たみたいだよ」

ミソラがそういうとウェーブライナーが駅に止まり。ツカサ、ゴンタ、キザマロ、ツカサが出てきた。しかし、ツカサ以外のゴンタ、キザマロ、ジャックはウェーブライナーから出でると同時にその場に倒れた。

「一ちょっと、どうしたの三人とも

スバルはそういつとミソラと一緒にツカサ達に近づいた。

「スバル・・牛丼あるか？」

「スバル君、僕はもうダメです」

「スバル・・お前らがいることはやつとついたか

ゴンタは、スバルが近づくなり好物の牛丼の事を聞き、キザマロは消えそうな声で一言いい、ジャックは何とか立ち上がった。

「ねえ、ツカサ君なにがあつたの？」

ミソラが四人の中で一番大丈夫そうなツカサに聞いた。ツカサはウェーブライナーの方を見た。それにつられてスバルとミソラが見ると、ルナがウイルスの大群が脅えて逃げだすんじやないかとう不気味なオーラを放っていて、何か言つていた。

「委員長になにがあつたの」

スバルはルナに聞こえないように質問した。

「スバル君とミソラちゃんが教室から出て行つてからああなつたみたいだよ」

ミソラは、なるほどと分かつたようにうなずいたが、スバルは何でという顔をしている。

「それで、始めは一人でいろいろ言つてたみたいなんだけど、なぜか僕たちが怒られて」

「委員長に説教されてたつてわけだね」

「そうだぜスバル」

ツカサが説明していたところにある程度回復したジャックが話し

に入ってきた。

「あ、ジャック。もう大丈夫なの」

「俺はな。くそ、あのドリル女め、ウーブライナーに乗つてからずつと俺達説教されてたんだぞ。」

「それで、キザマロ君とゴンタ君があんなことになつたんだね。」

キザマロとゴンタはまだ回復していないらしく地面に倒れていた。「どうする。ヨイリー博士も待つているだろ?」やがて行つた方がいいんじゃないの」

「でも、置いていくわけにはいかないよ」

しばらくスバルたちがどうするか考えているとツカサが「…ウイザード達に頼めばいいんじゃないの」と言つた。

「あ、そうだね。オックス、ペティア、モード委員長たちを頼めるかな?」

「いいぜ」

「了解です」

「ルナちゃんはまだおじょ」

「委員長は落ち着くまでいてあげて」

「分かりました」

「これでいいと思うんだけど」

「いいんじゃねえの」

「速く行こうよスバル君」

「そうだね」

ルナ達三人はウィザードにまかせ、スバルたち四人はWAXAの中に入つていった。

じめいじつ（後書き）

会話文が多くことよくな・・・

感想・アドバイス等よろしくお願ひします

WAXAで

- WAXA -

WAXAの中はサテラポリスの人たちが忙しそうに働いていた。スバルたちが中に入ると、ヨイリー博士が出迎えてくれた。

「すみません。遅くなつて」

「いいのよ、スバルちゃん。会議室で話をしましょうか。ついてきて」

スバル達はヨイリー博士についていった。

「ここが会議室よ

ヨイリー博士はドアの前に止まりドアを開け中に入つていった。スバル達は「失礼します」と言つて中に入った。すると中から聞いたことのある声が聞こえた。

「よお、久し振りだな、スバル」

「あ、暁さん」

暁シドウ。元ディーラーの一員だつたが、メテオGの事件ではスバルと一緒にキング達と戦つた。しかし、戦いの中で大爆発に巻き込まれて行方不明になつていた。

「え、あ、暁さん、生きてたんですね」

「おー!!ソラ、何だその言い方。まるで俺が死んでいたようじやないか。・・・まあ、確かに一度死んだけど。」

最後の言葉はスバルたちには聞こえないよう言った。

「でもどうしてですか。あの爆発に巻き込まれたらとても生き戻れるなんてこと・・・」

「スバル、俺あのとき電波変換してたよな」

「え、はい。してましたけど」

「電波変換した状態だったから爆発に巻き込まれた時、データとして電腦の中とかに散らばってたらしいんだ」

「でも、それがどう関係・・・あ」

「?どうしたのスバル君」

「ほら、委員長がジョーカーにやられたとき、散らばったデーターを集めて再構築したじゃない」

「そう、それで私とジャック、サテラポリスの人たちでシドウのデータを集めて再構築したのよ」

「クインティア先生」

クインティア。ジャックの姉で、元ティーラの幹部。ジャックと

一緒にメテオGを地球にぶつけようとしたがスバルに止められた。そのさい、ウイザードだったヴァルゴは、コーヴァスとともに、ブライビゲリートされた。

「久し振りね。あと、もう先生じゃないわ」

「はい。でも、暁さんアシッドは・・・」

「ああ、アシッドもちゅうさんとこるね。ウイザードオン」

暁が血の中心としたウイザードが出てきた。

「お久し振りです。みなさん」

「アシッド！久し振り」

「暁さん。もしかしてアシッドも再構築したんですか？」

「お、鋭いなミソラ。そのとおりだよ」

「そうなんですか・・・あ、もしかしてツカサ君やジャックが電波変換出来た訳って」

「気がついた。僕のハンターからジH///Iのデータが見つかって、スバル君の手助けが出来ると思つて再構築してもらつたんだ。」

「俺はコーヴァスがいれば戦つことが出来るからな

「へえ~、え、コーヴァスが再構築できただってことはヴァルゴも

「ええ、再構築してもらつたわ

「それで、そろそろ本題にはいっていいかしら」

「あ、すみませんヨイリー博士」

スバル達は指定された席に座ると周りの雰囲気が変わった。

「じゃあ、まずウイルスを出していたと思われる装置のことだけ
ど…」

「え、何で装置のことを探ってるんですか？まだ報告していないの
に」

するとシドウが「スバルたちが話している間にジャックが装置を
回収してメールで報告してくれたんだ」といった。

「話を戻すわね。その装置についてなんだけど作りが複雑でまだ
分からぬけど、その装置の中にこんなものが在ったの。」

ヨイリー博士はそう言つと田くて丸いものを見せた。スバル達は
順番にその丸いもの見た。

「これって石ですよね」

「ああ、ツカサの言つたとおり石なんだが、これただの石じゃな
いんだ」

シドウは見終わったスバルたちから石を預かり言った。

「えりあひ」とだ?」

「この石は少しだけど周波数を持つてゐるのよ。」

「え、石が周波数を持つてあるんですか?」

「時々あるんだよ。電波を沢山浴びると周波数を持つのが
「シドウさんのおつたとおつたの石ならたいしたことないんだけ
ど、この石は特別のよつだね。」

ヨイリー博士が言つたとこいつの間にかクインティアがウイルスを連
れて来ていた。

「姉ちゃん、そのウイルスは?」

「まあ見てなさい。ヴァルゴ」

「はあ~い。ティアやつちやつていのね?」

「ええ」

「りょーか~い。ゴッズレイン」

ハンターから出てきたヴァルゴが杖を振るとウイルスの上に雨が
降り出し、ウイルスがテリートされた。シドウが持っていた石をテ
リートされたウイルスの近くに置いた。しばらくすると突然、石が
しかしだしテリートされたウイルスが現れた。クインティアは再び
現れたウイルスを持って会議室から出て行つた。シドウは石を拾い
机に上に置いた。

「今、見たとおり、この石こまデータを自動で再構築する」とが出来るみたいなのよ」

「やつぱりウイルスが減らなかつたのはその石が関わつてたんですね。」

スバルが言つとシドウが答えた。

「そうゆうことになるな。だが、この石は力が弱いようだな。短時間で何体ものウイルスを再構築するのは無理なはずなんだ」

「それを装置を使って強引に力を底上げしたつてといひね。」

「そりだつたんですか」

スバルが答えると沈黙があとずれた。その沈黙を始めて破つたのはミソラだった。

「あの～、その石つていつたい何なんですか

「それがな、分からんんだ」

ミソラの質問にシドウが答えた。

「え、分からんんですか？」

「そりなのよ。地球でできたとは考えにくくし、ムーの物でもないのよ」

スバルの質問にヨイリー博士が答えると、ツカサが「ビ」のものか分からぬ石か・とささやいた。
シドウが石を持ち言つた。

「だが、この石があつた装置を作つたやつがいるはずだ」

「・・また戦いが始まるんですか」

スバルが言つた言葉に会議室にいたほとんどの人たちが息を飲んだ。

「・・・たぶんな。敵が分からぬため手の打ちようがないが、一応頭に入れておいてくれ」

「分かりました」

「よし、今回の話し合いはここまでだ。帰つていいで。あ、ジャックは上に行つてティアを手伝ってくれ」

ジャックは「何で俺が・・」とぼやきながら部屋を後にした。ジャックが出て行くとヨイリー博士がスバルに声を掛けた。

「あ、それとスバルちゃん、あなたに渡す物があるのよ

「何ですか?」

「ハイ、これ。預かってた『エース／ジョーカPG』よ。ノイズエンジはできぬけど、ファインライズができるようにしてあるから」

「あ、あいがといわせこまか」

「ここのよ。けど、メテオGがあるわけじゃないから不完全で前のよつの力は出せないから気をつけてね。じゃあ、気おつけて帰るのよ。」

スバル達は「はい」とこって会議室から出て行つた。

「・・あのPGM、渡してよかつたんですか?」

「スバルちゃんなら大丈夫よ。さあ、シドウちゃんは私と一緒に研究室に来て石があつた装置の解析を手伝つてちょうだい」

「え? 今からですか?」

「当たり前でしょ。さあ行くわよ。」

「はあ~また夜勤か・・」

シドウはさう言しながら研究室に向かつた。

捨い物と

- WAXA 外 -

スバルたちはシドウたちの話が終わるとWAXAから外に出てルナたちがいるウェーブライナーに向かった。

「それにしてもずるいよ。スバル君ばかりPGMとか貰つて強くなつて」

「いや、ミソラちゃんも十分強いと思つけど」

「それでも・・・肝心なときには一緒に戦つ」ことができない・・・

ミソラは思いつめたような顔をしてうつむいた。

「・・・だったら、ヨイリー博士に頼んでみたら? もしかしたらGM作ってくれるかもしれないよ」

「・・・そうだね、そうしてみるよ」

ミソラはスバルの言った言葉で少し元気が出たよううつむいていた顔を上げた。それからスバルとミソラは楽しそうに話し始めた。ツカサはそんな二人を少し離れたところで見ていた。そうしていると、遠くから三人が近づくのが見えた。

「お~い、スバルー」

「あ、ゴンタ」

ルナ、ゴンタ、キザマロの三人がスバルたちに近づいてきた。WAXAについてたときのルナの悪かつた機嫌は元に戻っているようだつた。

「ゴンタ、キザマロ、委員長の機嫌が直ってるようなんだけど何があつたの？」

スバルはルナに聞こえないう間にゴンタとキザマロに聞いた。

「モードとペティアたちががんばってくれたそうです」

「本当に大変だったんだぞ」

キザマロは理由をいい、ゴンタは恨むぞといつ顔をしている。そんな中ルナが聞いてきた。

「ちょっとスバル君話し合いは終わったの」

「うん、もう終わつたよ」

「せつかく今から行こうとしていたのに・・・まあいいわ、ウエーブライナーに遅れるから話はそこで」

スバルたちは駅に向かつて走り出した。

- ウエーブライナー -

今はスバル、ミソラ、ツカサの三人でルナたちにWAXAでの出

来事を説明していた。また戦いが始まるかもしれない」とも一応話した。

「……そう、また戦いが始まるのね」

「大丈夫なんですか?」

「多分ね。もし始まつたら、今までと同じようにドキドキすることを精一杯するだけだよ」

「がんばってください。僕はスバル君たちを応援しています」

「ありがとうございます、キザマロ」

キザマロはスバルと話をしているが、ルナは心配している顔をしていて、ゴンタは何か考え方をしている。そんな時ウェーブライナーに放送が掛かった。

『次は「ダマタウン」。お降りの方はお忘れ物のないよう』

「あ、『ダマタウンに着いたみたいだよ。』

ツカサが言つとミソラが言つた。

「私はベイサイドシティーだから、また明日」

「そうだったね。じゃ、また明日学校で」

「うん、また明日みんな」

ミソラが手を振ったのでスバルは手を振り返してウェーブライナーを出た。それからしばらくの間スバル達は夕日に染まる町を歩いた。分かれ道に来るとツカサは「僕はこっちだから、また明日みんな」といつてスバルたちと別れた。それからルナ達と別れてスバルも家に帰った。

-スバルの家-

「ただいま」

「お帰り、スバル」

スバルは玄関に入るとあかねがエプロンの姿で迎えた。

「今日はやけに遅かったわね。何かあったの？」

「ちよっと、WAXAに呼び出されてね。後で話すよ」

「分かったわ。大吾さんは夜勤で今日は帰らないそうよ。」

「え? 今日もなの?」

「ええ、なんだか一週間前からFM星だつけて? そことの連絡ができないそつのよ。」

「そうなの?」

「らしいわよ、そのために働いているそつの」

そう言つとあかねは台所に向かつた。

「なんかあつたのか」

「うわー驚いた。ウォーロックいつから戻つてたの。」

「ついさつきだ。畜生ハープのやつ。いきなり氣絶させやがつて。ブツブツ・・・・」

ウォーロックが一人でいろいろ言い始めたので、スバルはウォーロックを置いてリビングに向かつた。机にはカレーがあつた。

「わあ、今日はカレーなんだ」

「沢山あるわよ」

「いただきます」

スバルはカレーを食べ始めた。あかねも椅子に座つてカレーを食べ始めた。

「そりいえば今日学校に転校生が来たんだ」

「へえ～どんな人？」

「それがね、ツカラ君にジャック、それにミソラちゃんだったんだよ」

「え、ミソラちゃんが転校して來たの」

「うん、本当みんな何の連絡もなしに来るんだから驚いたよ」

あかねは「だからミランちゃん頼んできたのね」と言つた。

「？？」

「いや、何もないわ。それより、WAXAで何の話をしたの」

「ええと」

スバルは暁が生きていること、毎日ウイルスの大量発生があったこと、また戦いが始まるかもしれないことを話した。

「そう、あまり無茶しないのよ。」

「うん、分かつてるよ。御馳走様」

スバルはそのまま自分の部屋に行つた。

スバルは部屋に入ると近くにあつた分厚い本を取り読み始めた。ウォーロックは何もすることがないようでハンターの中で寝ている。

- 展望台 -

周りが暗闇に染まつていて、突然空間に赤い光があたりを照らした。その光が收まると紫色の石一つ地面に落ちた。

-スバルの家-

静かになつた部屋の中で、さつきまで寝ていたウォーロックがハンターから飛び出てきた。

「おい、スバル

スバルは本を読みながら「なに、ウォーロック」聞いた。

「ちよつと、展望台に行かねえか

「・・明日は雨でも降るのかな?」

「何だとこのやういつ

「だつて今までウォーロックが自分から展望台に行こうって言ったことなかつたんだよ

「確かにそうだがよ。・・・少し妙な周波数を感じてな

「分かつた。行ってみよう

スバルは準備をすると部屋を出て行った。

「あら、スバル。展望台に行くの

「うん、ちよつと遅くなるかもしないから

「分かつたわ。いつてらっしゃい

「いつときまわ」

スバルはそつと展望台に向かった。

・展望台・

「・・何もないね」

「おかしいな。さっきは確かに感じたんだが・・」

スバルは今展望台に来てウォーロックの感じた周波数を探している。

「あれ? ねえ、ウォーロック。これって何だ?」

スバルは落ちていた紫色の石を見つけて拾った。

「その石から何を感じねえぞ。それがどうした」

「いや。ただ、昨日ここに来たんだけど、そのときはこんな石な
かつたから」

「そうか。・・どうやらなにも無いようだな」

「うん。ウォーロックの勘違いだったのかな?」

スバルは辺りを見回しながら言った。

「確かにあの時は感じたんだがな。まあいいか。とつとと家に帰
るつぜ」

「ちよっと待つてよ。せつかく来たんだからもう少ししゃべりたいよ

「うふ

ウォーロックはいやな予感を感じながらスバルに「何だと?」と聞いた。しかし、スバルはウォーロックが言ったときにはもう星を見ていた。ウォーロックはしばらくの間「あ~い。」「スバル」といつたがまったく聞こえてないようで返事もしない。ウォーロックは諦めたようで静かになつた。

展望台の近くである電波体が話してゐるようだ。

「本当にスバル君があのロックマンなの?」

「ええ、だから話のついでに確かめてみたらどうですかとせつきから言つていいでしよう。」

「あ~もう、分かったわよ。行くわよ、ユニークーン

「了解」

電波体たちはスバルがいる場所へ向かつて行つた。

「! おいスバル。星を見る時間は終わりだ。」

「え、何で?」

スバルは体を起こすと前から電波体が来ているのが見えた。電波

体の周りには青い球体が現れていた。

「フリーズボール」

「つち！」

ウォーロックは体を起こして身動きが取れないスバルを突き飛ばした。青い球体が飛んできてスバルがいたところに着弾し、氷付けになっていた。スバルたちの近くには、白いアーマーをつけた淡い青色の電波体がたつっていた。

アイスユニコーン

- 展望台 -

スバルは今ウォーロックのおかげで電波体の攻撃をかわすことができた。淡い青色の電波体は頭に白い小さな角があり、右手には鉾を持っていた。スバルはウォーロックにお礼をいいついでも電波変換ができるようにハンターを構えた。すると電波体がスバルに質問してきた。

「星河スバル君だよね。地球を三度救つた英雄のロックマン」

「・・・君は何者?」

「この姿の名前は、アイスユニコーン。手合わせをお願いしたいんだけど、どうかな?」

「へ、なにが手合わせだ。いきなり攻撃してきやがって、戦えて言つてるもんじゃねえか。強引なやつだぜ」

「それ、ウォーロックがいえること?」

「うるせえ。それよりどうするんだ。あつちは俺らのこと知つてみたいだぜ」

「戦うしかないみたいだね。いくよ、ウォーロック。電波変換」

スバルは光に包まれロックマンの姿になっていた。

「「わ、本当だつたよ」

「へ、ぢりあひ」と

「氣にしない、氣にしない。じゃ、始めよつ」

「「ウエーブバトル ライド・オン」」

「エドギリブレード」

スバルは手から剣を出すとアイスユニコーンに斬りかかった。アイスユニコーンは持っていた鉾の先で受け止めた。

「ちよつと、手加減とかないの」

「よくわからせ。余裕つて顔してるぜ」

ウォーロックが言つとアイスユニコーンはふつと笑つと距離を取り鉾を振つた。スバルはエドギリブレードで受け止めたが簡単に折れてしまった。

「その剣つて脆いね」

「それは、どうかな?」

スバルは再びエドギリブレードを出しあアイスユニコーンに斬りかかつた。アイスユニコーンは受け止めずに鉾を振り、剣と鉾が交わつたがエドギリブレードは折れなかつた。

「……強度だけじゃないね。威力も上がってるね」

「エドギリブレードは連續で使えるを使つほど強くなるんだよ」

「便利な剣だね」

そう言つとアイスユニークーンは再び距離を取ると周りに青い球体を複数出現させた。

「フリースボール」

アイスユニークーンは鉾をスバルの方に向けると球体がスバルに向かつて飛んできた。

「スバルあの攻撃はあまり当たるなよ。凍つて動きずらくなるぞ」

「分かった」

スバルは周波数変換を使いかわした。

「ちよつと、少しごらり当たりなさいよ」

アイスユニークーンは再びフリースボールを使いスバルに向かつて飛ばした。スバルは「敵の攻撃には素直には当たらないよ」と言うとマッドバルカンを使い襲つて来る球体を撃ち落とし始めた。

「……スバル上だ」

「スノウフロウズン」

アイスユニコーンが持っている鉾が雪を纏い振り下ろした。スバルはとっさにエドギリブレードを出し受け止めたが、吹き飛ばされた。スバルはたとうとするが地面にはついている氷に足がとられてうまく立てない。さらに、受け止めた方の手が凍っていた。

「くそ。あの攻撃もか

ウォーロックが言うとアイスユニコーンがスバルに向かつて鉾を振り下ろした。が、喉元で鉾を止めた。

「どうする？ 降参する？」

そのとき炎を纏った剣がアイスユニコーンに突きつけられていた。アイスユニコーンが後ろを向くとスバルが凍っていた手からファイアスラッシュを出していった。

「・・なんで？」

アイスユニコーンは焦った様子も驚いた様子もなしに聞くとさつきまでスバルがいた場所を見た。そこにはスバルの姿はなかった。

「ヘンゲノジュツだよ。つまり君が攻撃したのは偽者だったってこと

スバルは構えを解かずに言った。ウォーロックは出てきて「どうだ。降参するか？」と言った。

「あ～あ、降参。変わり身つてあり？」

アイスユニコーンはそう言うと電波変換を解いた。そこには瞳

と髪が薄い青色で、背はスバルと同じぐらいの女の子が立っていた。スバルも電波変換を解いた。

「君は誰？」

「・・私のこと覚えてないの？」

女の子はスバルを見ながら聞いた。スバルは思い出そうと記憶を探つた。

「『』めん。分からな」

「そつか。まあ、仕方ないかな。小学一年生の頃だつたし」

「小学一年・・・あ、もしかしてアオイちゃん？」

「思い出してくれたんだ。そうだよ。久し振りスバル君」

スバルは思い出したようで、アオイと呼ばれる女の子と話し始めた。そんな中状況が呑み込めてないウォーロックはただボーとしていた。

「・・おースバル。この女だれだ？」

「あ、ウォーロック。この子は海月アオイちゃん。小学一年生の時の友達だよ」

「ウォーロックだね。はじめて」

ウォーロックは気が合わないのかそっぽを向いた。

「そりゃあ。何で僕がロックマンだつて知ってるの？」

「ああ、それね。この子に聞いたの」

アオイはそういつとハンターから頭に角がある白色の電波体を出した。

「スバルさんにウォーロックですね。初めまして、私はペガサス様の使者ユニコーンと申します。」

ユニコーンはスバルとウォーロックに自己紹介をした。

「え、ペガサスってあの三賢者の？」

「はい。ペガサス様からFM星で起きたことをスバル様に伝えるようにと言わされて参りました」

「・・・FM星で何かあつたのか？」

「実はアンドロメダの鍵が盗まれただつて」

「アンドロメダの鍵が盗まれただつて」

ユニコーンはスバルの驚きよつに少し戸惑っている。

「いえ、鍵じゃなくて鍵の設計図が盗まれたのです

「鍵の設計図？そんなものがあつたの？」

「何でケフェウスのやうはそんなものを持つてたんだ」

ウォーロクはユーローンに聞くと今まで三人の話を聞いていたアオイが言った。

「・・そのFM王だけ？その人がどんな人かは分からぬけど多分持つておきたかつたんじゃない？」いざとゆうときのための力を

「話が逸れました。それで、設計図を盗んだものはFM王に不満を持つFM星人の反逆者だそうです」

「そんなことが起きてたんだ。ケフェウスは大丈夫かな」

スバルはケフェウスを心配しているようだがウォーロックは興味ないと言つ顔をしている。

「それで、設計図を奪つた電波体たちつて何処にいるの？」

「それは・・・実はここ地球に居るらしいんです

「！－ち、地球に来てるの？」

「はい。それを伝えよつにも地球との連絡が取れなので我々が来たのです。」

「我々つてことは、てめえ以外にも誰か来てるのか

ウォーロクは珍しくまじめそうな様子で聞いた。

「私以外に一人。レオ様、ドラゴン様の使者のものが来てています

「そうだったんだ。え、ヒーリングはコーンはアオイちゃんの
ウイザードなの？」

「ええ、実はそうなんです」

スバルはコーンに聞くとコーンは申し訳なによつた様子
で言った。スバルはアオイを見た。

「スバル君どうしたの？」

「アオイちゃんはいいの？ 危険な目に遭うかもしれないんだよ」

「うん、まあそつなるんだろうナビ、私はいいわよ」

スバルは何か言いかけたがアオイに止められた。

「それから、明日のこと電波変換だっけ？ それができる人た
ちに教えておきたいからスバル君集めてくれる？」

「だったら、明日WAXAに行こう。そこなら既さんたちも居る
し」

「分かったわ。明日レオヒヂラーンの使者たちと一緒に連れてく
るから後のことよいじく」

「うん、明日学校が終わったら元気来るね

アオイは「了解。じゃあ、また明日」といつと電波変換をして帰
つていった。スバルはしばらくの間立つたまま考え方をしていたよ

うだが、ウォーロックに「そろそろ帰りないと怒られるぞ」と言わ
れて家に帰ることにした。

スバルは玄関に入ると「ただいま」と言ってリビングに向かつ
た。リビングにはあかねがテレビを見ていた。

「あらスバルお帰り。遅かつたはね何があったの?」

「うん。展望台でアオイちゃんにあつたよ」

「アオイちゃんって小学一年生のときによくいた?」

「用があつたらしこよ」

「うう。お風呂沸いてるわよ」

「うん。分かつた」

スバルはそう言つと自分の部屋に行って荷物を置いた後お風呂に入るために降りていった。

スバルはお風呂から上がり上がると自分の部屋にあるベッドに寝込んだ。
だ。すると、ハンターからウォーロックが出てきた。

「やつから向考えてんだ」

「いや、ケフュウスのことが心配でね。それにしても、FM星人
がまたやって来るなんて」

「そうだな。けど、地球を守るためにだつたら戦うんだろ」

「うん。当たり前だよ」

ウォーロックは「明日遅れるぞ。さっそく寝る」と言った。

「分かった。お休みウォーロック」

スバルは布団に入り眠りについた。

アイスユニローン（後書き）

戦闘描写が短かつたですかね。

感想・アドバイスよろしくお願いします。

自己紹介

—コダマ小学校—

スバルは昨日ユニコーンに聞いたことを考えていたらしく遅刻ギリギリで学校に来た。教室に入った瞬間ルナに怒られたのはいうまでもない。スバルはみんなに「おはよう」と言つて席に座ると先生が教室に入ってきた。

「（・・・昨日ウォーロックの言つとおりにすぐに寝ればよかつた）」

スバルはまだ眠たそうにしてた。先生が出席を取り終わったようで今日の日程について話していた。

「よし。これで一通りは終わったな。じゃあ、今から昨日こられなかつた転校生を紹介するぞ。入つてくれ。」

先生がそういうとドアからスバルより少し背が高くて頬に傷がある男の子が入ってきた。

「ひさこ竜牙です。これからよろしくお願ひします

「えーと、席はスバルの隣だな」

竜牙は荷物を持って席まで歩いて行くとスバルの前でとまつた。スバルは竜牙に見られていてことに気づいてスバルも竜牙を見た。竜牙は笑顔を作つて「よろしく」と言つて席に座つた。スバルも「よろしく」と言つた。

「よし、ホームルームはこれで終わりだ。授業の準備を忘れずに
な」

先生は教室から出て行った。スバルの周りにルナたちが集まってきた。

「まつたく、昨日注意したばかりじゃないの。何でギリギリで来
るのよ」

「本当ですね。今日なんか遅すぎてスバル君を置いてきましたし
ルナとキザマロが朝のことを話しているとソラが「何かあつた
の?」と聞いてきた。

「うん。ちよっといろいろあってね。あ、そうだみんな今日WA
XAに来れる?」

みんなは行けると言った。ツカサがスバルに聞いてきた。

「何か分かったの?」

「うん。学校が終わったら展望台で待ち合せをしてるんだ

「そうなんだ」

「ん?けど、先生らが俺とツカサ、スバルにソラは昨日授業に
出でないから放課後補習授業があるらしいぞ。」

「え、なにそれ聞いてないよ」

スバルは本当に?と聞くよつて言つたシカサミソラが「そりゃいいよ」と言つた。そこにドアが開き先生が入ってきた。

「なにしている。授業始めるぞ」

みんなは席に着いた。スバルは困ったなという顔をしていた。ウオーロックはハンターからスバルに聞いてきた。

「何だ、遅れたら何かまずいのか」

「あ～うん。遅れたら委員長みたいに説教するときがあるからね」

「スバル。ま、あれだ、がんばりな」

スバルは「連絡の取り方を聞いておけばよかつた」といつていた。

「よし、これで終わりだ。みんな気おつけ帰れよ。それと、スバル、ミソラ、ツカラ、ジャックは補習があるみたいだから終わってから帰れよ。」

あれからスバルはルナ、ゴンタ、キザマロに展望台に行ってアオイに遅れることを伝えてほしいと頼んだが生徒会の仕事があるようで断られた。それ以外にもいろいろ考えたがアイディアが思いつかなかつた。ホームルームが終わつてから、少しだつと先生が入ってきた。

「四人もいるな。じゃ、補習授業を始めるぞ。」

「あの～先生、用事があるので補習は今度ではダメですか？」

「来週からは時間が取れなくなるから無理だな。急用か？」

「いや、急用と言つぽひじやないですか？」

「だつたらいいな。始めるだ。教科書の23ページを・・・」

先生は補習授業を始めた。ミソワ、ジャック、ツカサは授業をしつかり受けていたが、スバルはこのあとのことを考えていって先生の話があまり耳に入つていなかつた。

-約三十分後 -

「よし、これで補習授業は終わりだ。氣おつけて帰れよ」

先生は持つてきたノートや教科書を持つて教室から出て行つた。

「やつと終わつたね」

「長かつた」

「三十分ぐらいしかたつてないけどね

「え、そんなにたつてるの？まづい・・・」

ミソワ、ジャック、ツカサが話している中、スバルあせり始めたと思つと荷物をまとめた。

「スバル君ビリしたの？」

「『んめん。ちょっと展望台に行つてくるね』

スバルは荷物を持つと走つて行つた。ミソラは「ちょっと、スバル君待つてよ」と言つてスバルを追いかけた。ツカサとジャックはどうしたんだろと思いながら荷物を持ってスバルたちを追いかけた。スバルは廊下を走つて角を曲がつたとき誰かとぶつかつた。

「イタタタ・・・

「『』、『めんなさい大丈夫ですか？あ、』

スバルがぶつかつて謝つたときミソラたちが来た。

「大丈夫スバル君？あ、たしか君は緋哉君だつたよね」

ミソラはスバルが大丈夫か聞いた後ぶつかつた方の相手を見て言った。竜牙はスバルとぶつかつたところを手で押えていた。

「・・なんなんだよいきなり飛び出してきて」

「『めん。緋哉君ちょっと急いでいて、その・・・』

緋哉はため息をつくと「べつにいいよ」と言つて立ち上がつた。

「とにかくでやけに急いでいたようだけど何があったの？」

「あ、やばい速く行かなきゃ」

スバルは立ち上_がるとまた走り出した。緋哉はミソラたちに「何があつたの・・?」と聞いた。

「ううん、まあ、話は後にしてスバル君を追いかけようよ」

ツカサが言_うとミソラ、ツカサ、ジャックは後を追いかけた。緋哉はまたため息をついて四人の後についていった。その途中に仕事が終わったのかルナたちと合流した。

スバルが学校の校庭に出て校門に向かつた。スバルが校門から出て展望台に向かおうとしたとき声を掛けられた。スバルは声のした方を見るとアオイ達がいた。アオイはものすごい不機嫌な様子だつた。アオイの近くには藍色の髪が肩まであり、寂しそうな目をしている男の子と瞳が赤色で髪は黒の力が強そうな男の子一人がいた。

「何なのよ。学校が終わつたらすぐにWAXAいくつて言つてたのにどれだけ待たされたと思つてるのよ。」

「アオイちゃん」「めん。ちょっと急用ができてそれで・・」

「うるさいーもう、言い訳するところは変わつてないんだね」

スバルは遅れた理由を説明しようとしたが、言い訳扱いされた。スバルは肩を叩かれたようで振り向いて見るとミソラ達がいた。ミソラとルナは不機嫌そうだった。

「ねえ、スバル君子の人たち誰なの?」

「あ、もしかして響ミソラちゃん? わあ、本物だ。あれ? でもな

んで居るの?」

ミソラがスバルに説明を求めたときアオイがミソラの手を取つていた。

「おい海月。先に自己紹介をした方がいいんじゃないのか?俺もまだアレスに事情を聞いただけでよく分からないんだが」

アオイの近くにいる赤い瞳をした男の子が言つた。

「それもそうだね。私は海月アオイ。よろしく」

「俺は赤瀬宵磨

「僕は空照矢」

アオイ、赤い瞳の男の子、藍色の髪をした男の子の順に言つた。

「星河スバルです」

「響ミンラです」

「コダマ小学校生徒会長の白金ルナよ」

「俺は牛島ゴンタだ」

「最小院キザマロです」

「・・・ジャックだ」

「えつと、双葉ツカサです」

「コダマ小学校に転校してきた緋哉竜牙です」

アオイたちが自己紹介したのでスバルたちも順番に自己紹介した。自己紹介が終わると宵磨がスバルに近づいた。

「星河スバルってことは君が英雄のロックマン?」

「あ、えつと、それは・・」

スバルは宵磨のいきなりの質問に対し竜牙を見ながらどう答えようかと考えていた。スバルの視線に気づいたようで竜牙は落ち着いたまま言った。

「安心して。誰にも話さないよ」

「ありがと。うん、僕がロックマンだよ」

スバルは竜牙にお礼を言いつと宵磨の質問に答えた。

「ところで、スバル君ここにいる人全員関係者?」

「うん。一応関係者だよ」

「ねえ、僕らのウイザードも紹介しておいた方がいいんじゃないの?」

黙っていた照矢が言った。

「それもそうだね。 ウィザードオン」

アオイがユーローンを出すと宵磨と照矢もハンターからウィザードを出した。宵磨のハンターからはレオに似た姿のウィザードが、照矢のハンターからは灰色の翼があるウィザードが出てきた。

「ずいぶん懐かしいやつが揃ってるな」

「何だ、牛カルビにカラスもいるのか」

レオに似たウィザードが「うつ」と「ンタビジャック」のハンターからオックスと「ーヴァス」が出てきた。

「ブロロロ・・・今すぐ丸焼きにしてやるつか？」

「ケケケ・・・アレス今すぐバラバラにしてやるつか？」

「何だよオックスに「ーヴァス。 ちょっとしたジョークじゃないか」

「コーヴァスとオックスは「うるせえ」と言ってアレスと呼ばれたウィザードを追いかけた。ユーローンと灰色のウィザードはその光景を見てため息をついていた。スバルたちは三体のウィザードの追いかっこを唖然とした状態で見ていた。

「・・・ねえ、ウォーロック。あの、コーヴァスとオックスが追いかけている電波体つて誰？」

「あいつは、アレス。FM星にいた頃の知り合いだ。ああゆう風にしようとからかわれた」

「それと、白い角がある電波体がユニコーン。灰色の翼がある電波体がディムネスよ」

ハープがスバルたちに紹介するとユニークーンとディムネスが挨拶した。

「さて、自己紹介も終わったことだし、あとはWAXAだつけ？いきながら話そうよ」

「それもそうだね」

みんながアオイの意見に賛成するとまだ追いかけっこをしている三体をハンターに戻してスバル達はWAXAに向かった。

自己紹介（後書き）

勉強が忙しくなり投稿がさらに遅れるかも知れません。

感想・アドバイス等よろしくお願いします

動き出すものたち

- ウェーブライナー -

今スバル達はウェーブライナーの中で楽しく話し合っている。ソラとルナはアオイと仲良くなり、宵磨はジャック、ゴンタ、竜牙と氣があつたらしくウィザードのことについて話していた。キザマロは照矢がいがいに物知りだったようでマニア的な話をしていた。オックスとコーヴァスはアレスをまだ追いかけていて他のウィザードはそんな光景をあきれたように見ていた。スバルがみんなを見ているとツカサが言った

「聞いたよ。今回の事件について」

「え、誰から?..」

「ジーハーから。ワイザードたちのほうが理解が早いと思つたみたいで、ゴーコーンたちが話してくれたみたいだよ」

「やうなんだ」

「ところでも。スバル君つてアオイちゃんと知り合いたいだつたんだけど、どうゆう関係?」

「じつゆつて、一年生の友達だつたんだよ」

「へへえ、そうだつたんだ」

スバルとツカサはWAXAにつくまで雑談などをしていた。

- WAXA -

WAXAにはいるとスバルはサテラポリスの人々に「暁さんに会いたいんですけどどこにいますか」と聞き教えてくれた部屋に向かった。部屋に入ると中は真っ暗で誰かが寝ているようだつた。ジャックが電気をつけると机でうつぶせになつて寝ていた暁が目を覚ました。スバルたちが暁の顔をみるとほとんどみんながヒイタ。

「あ、暁さん。どうしたんですか？まるでオバケですよ」

「・・・何だお前らか。しかたないだらう一日続けて寝ずに仕事をしていたんだ。ついさっき終わつて寝ていたのに起こしやがつて。それに、オバケはひどいだろブツブツ・・」

ミソラが言つたことに不満を持つたのか一人でいろいろ言い始めた。アオイはスバルに近づいて聞いた。

「ねえ、この人がサテラポリスのエース暁さん？」

「うん。なんだか、仕事が大変だつたみたいだね」

すると暁はさつさと寝たいのか「用はなんだ」とぶつきらぼうに聞いてきた。

「えーと、FM星人の数名がこの地球に来ている」と云つてなんですけど」

スバルが言うと暁は眠気が消えたのか真剣な顔つきになつた。

「ＦＭ星人が地球に？本当なのか」

「はい」

「分かった。ちょっと待つてる。」

暁はハンターを取り出してヨイリー博士と長官を呼んだ。

「今、ヨイリー博士と長官を呼んだから少し待っててくれ。ところでスバル。」

「何ですか？」

「なんだか俺が知らないやつがいるようなんだが誰だ？」

暁が言つとアオイ、宵磨、照矢の順に自己紹介した。

「でこつちが、僕らの学校に転校してきた・・・」

「緋哉竜牙だろ。」

「えつ、暁さん知つてたんですか？」

「ああ、前に少しな」

暁がそう言つたのでスバルたちが竜牙を見ると「いろいろあってね・・・」と言つた。そこに、ヨイリー博士と長官が入ってきた。

「暁くん何があつたのかい？」

「あら、みんないりつしゃい。」

「アイリー博士、長官にじんにちは

スバル達が挨拶すると暁はアオイ、宵磨、照矢、竜牙を紹介した。

「さて、スバル分かつたことを教えてくれ」

「はい」

スバルはまずアオイたちのウェザード達がAMせいの三賢者の使者であること。FM星でアンドロメダの鍵の設計図が盗まれたこと。地球との連絡が取れなくなつたためユニコーンたちが地球にきたこと。設計図を盗んだFM星人が地球に来ていることを話した。

説明し終わると長官は「そうか・・・」といつて今後のことを考えていた。すると暁がユニコーンたちに質問した。

「その設計図なんだが、アンドロメダの鍵を作るのに最低どのくらい掛かる?」

「材料はあまり見ることがない物ですから集めるだけで多分一ヶ月ちょっとはかかるでしょう」

「それに、エネルギーを吸収したりするために膨大なデーターが必要ですからさらに掛かりますね」

「材料、膨大なデーターを集めていたらは一週間ちょっとぐらいですね。組み立ては簡単と聞いていますから。」

ディムネス、ユニコーン、アレスの順に答えた。長官が言った。

「つまり、相手の人数は分からぬが、材料・データーを集めるだけで一ヶ月掛かり、鍵を組み立てるのは一週間で出来るといつことだな」

ユニコーンたちは「はい」と答えた。

「それに、ユニコーンちゃんたちの話を聞くとFM星人たちは一週間ぐらい前に地球に来たってことね」

ヨイリー博士が言つとユニコーンたちは否定した。

「いえ、FM星人が来たのは遅くて二日前です。鍵の設計図が盗まれたとレオ様に聞いてすぐに我々も地球に向かつたんですから、一週間前なんてことはありません。」

「だが、FM星と連絡が取れなくなつたのは一週間前なんだ」

暁の言つた事実に「ディムネスは『そんな、バカな』といった。スバルは『どうゆうこと?』と言つた。

ユニコーン、ディムネス、アレスは地球との連絡が取れなくなつたのは一日前ぐらい前なのに、WAXAはFM星との連絡が取れなくなつたのは一週間前というのだ。FM星から地球に来るのに五日も掛かる事はない。しかも今はノイズウェーブもほとんどの電波体が使うことができ、ノイズウェーブを使えば一日ぐらいあればFM星から地球に行くことが出来る。

「・・お前らは地球に来るのにノイズウェーブを使ったよな？」

「はい。それを使えば地球にはすぐここに来ると聞いていたので」

暁の質問にアレスが答えた。

「ノイズウェーブになにがあるな。長官、ここんど調査班をだしていいですか？」

「いいだろ。」

長官は暁のノイズウェーブ調査を許可した。

「あ、それと。スバルたちには悪いんだがまた力を貸してくれないか？」

「つてことは、遊撃隊を復活させるんですか？」

ミソラが手を上げて聞いた。

「ああ、F M星でのことを聞くとW A X Aだけだったら無理だと思つんだ。今考えているメンバーを言ひなさい。」

暁はスバル、ミソラ、ゴンタ、ジャック、ツカサ、アオイ、宵磨、照矢を順番に呼んでいった。

「今呼んだ中で無理だとこいつやつはいるか？」

「あの、僕戦いとかそういうの得意じゃないんですけど・・」

暁の問いに照矢はおもむろに答えた。

「得意じゃなくていいさ。戦いは経験だからな。他に質問とかないか？」

スバル達は何も言わずみんな覚悟を決めたような顔つきでいた。

「よし、サテラポリス遊撃隊再結成。さっき言ったメンバーの中に俺とティアも入るからな。今日はありがとう。氣をつけて帰れよ」

暁はそういうとなぜかジャックも連れて部屋から出て行った。ジャックは「おい、何で俺も連れて行くんだよ」と叫んでいた。

「そういえば、ヨイリー博士ウイルスの大量発生のときにあった装置の解析どうでしたか？」

「それがまだなのよ。がんばってはいるんだけどね。」

「装置つて何ですか？」

スバルとヨイリー博士が話していると、話の中に出でてきた装置についてアオイが聞いてきた。スバルは昨日あつたことを説明した。説明すると育磨が言った。

「そんなことがあつたのか。それって地球上に来たFM星人と関係があるのか？」

「それはまだ分からないわね」

「ヨイリー博士。私の友達に装置・データーの解析とかについて

詳しいと言つたが、そうゆうことが得意な人がいますけど、よかつたら紹介しましようか？」

「おい、海月。まさかあいつか？」

「あたりまえでしょ。彼意外誰がいるのよ。」

「まあ、確かにあそこまで行けば得意といつより天才だな」

「その子名前は何でいつの？」

「奏助。そうすけ雪島奏助です」

「奏助ちゃんね。」など紹介してね。それじゃあ、私はまだ仕事があるから行くわね。」

ヨイリー博士はアオイと宵磨との話が終わるとヨイリー博士は部屋から出て行つた。長官はスバルたちを出入り口までおくると「それじゃあみんな、気をつけて帰るんだよ」といつた。

スバルたちがWAXAからすると照矢は「僕、用事があるから先に帰るね」と言って電波変換して帰つて行つた。すると、宵磨も「俺もこれから仕事があるから先に帰るな」といつて照矢と同じで電波変換をして帰つていつた。スバル達はウェーブライナーまで歩きながら話をしていた。

「ねえ、アオイちゃんつて宵磨君と知り合いなの？」

「うん。同じ学校だからね」

「そりいえば、アオイちゃんはどこに住んでるんですか？」

ツカラの質問に答えたあとキザマロが聞いてきた。

「えっと、私と宵磨君はリストイータウン。それと、照矢君はたしかフレイグタウンだったかな？」

「リストイータウンってたしか、今度おれたちが社会見学で行くところだつたよな委嘱だよ。」

「え、社会見学？」

「・・・スバル君。まさか、先生の話聞いてなかつたの？」

ルナは社会見学のこととを聞いていなかつたスバルを今にも怒り出しそうな顔で見た。

「あ、えっと、事件のことを考えていて聞いてなかつたというか、なんと言つか・・・」

「まったく。明後日の土曜日、リストイータウンにある『ループ・インフォメーション』を見学することになつたのよ」

「今日の放課後にその打ち合わせがあつたんですよ」

ルナが説明するとキザマロが言ひた。

「え、明後日なの？私たちも授業で『ループ・インフォメーション』を土曜日に見学すことになつてるの」

「じゃあ、一緒に見学することになるのかな？」

「そうだといいね」

スバル達はそれからウェーブライナーに乗り、家に帰るまで楽しそうに話していた。

- ? ? ? -

外は満月が町を照らしている。その光が窓から差し込んでいた。ここは廃墟となつた工場らしく古くなつてボロボロの機械が沢山ある。機械の上に突然影が現れた。影は一つではなく五つあり全部電波体の様だ。沈黙が支配している中、一人の電波体が口を開いた。

「反逆者が揃つのも久し振りだな。まさか、一週間もあつたのにパートナーが見つかっていませんなんてことはないよな？」

「連絡したでしょ。それにしてもサイレンント、あなたに合つ周波数を持つ人間がいたなんて意外だつたわ。」

「スワイフトさんよ。俺をからかつてんのか？」

最初に話したのはサイレンントと呼ばれているらしく殺氣のこもつた低い声で言つた。一方サイレンントをからかつたらしい電波体はスワイフトといつりしへ少し声が高じようだ。

「二人とも話はそれぐらいにして速く話を終わらせましょ？」

「速く終わらせたい理由はパートナーが心配だからか？えりく地球^{つち}の生活に慣れているようだな」

サイレントは冷たく言い放った。

「・・ところで僕らを集めた理由は何ですか？リーダー

名前の分からぬ電波体が会話を聞いていた電波体に向かっていつた。

「そのことなんだがな。AM星の三賢者の使者のやつらがロックマン達に接触した」

「へ～え、意外だね。てっきりFM王が来ると想つたのに

スワイフトが残念そavisに言つてサイレントが言つた。

「使者とかいうやつが来たってことねやつと暴れることが出来るんだな。さてどこの人間どもを血祭りにしてやろうつかな？」

「サイレント、悪いがお前の出番は後だ

「うう、せっかく楽しくなってきたと思つたのに

リーダーと呼ばれる電波体が言つてサイレントは短剣を仕舞つた。

「やつらはこの土曜日にリストタウンにあるアドミストとかいつところに行くようだ。リミスお前が行つてくれないか？」

「・・僕ですか。まあいいですけど、パートナーがなんて言つた

な

「その点は何とかしる。目的はやつらの力量を量ることとそこにある『ループインフォメイション』の情報処理データーなどを奪つてくれ」

「・・・」解。何とかしてみます

「今日の話しがこにはじこまでだ。みんな帰つていいぞ」

リーダーの電波体がいつともつかこには影は一つもなかつた。

動き出すもののたち（後書き）

暁の顔は想像にお任せします

社会見学

・「オダマタウン」

今日は土曜日。スバル達は社会見学でリストイータウンに行くため学校の校庭に集まっていた。クラスの人気が集まってる中ルナはなぜか今にも怒りそうな態度を取っていた。

「遅い、遅い、遅い・・・スバル君、ゴンタはまだ来ないの?」

「う、うん。今キザマロが呼びに行っているよ。」

どうやら、ゴンタが寝坊して、キザマロが起きて行っているみたいだ。

「それにしても遅いねゴンタ君。もうすぐ出発なの!」

ミソラは校庭を見渡しながら言った。ツカサとジャックはクラスのしおりを作るのや先生たちの荷物を運ぶのを手伝っているようだ。スバルたちが話していると遠くからキザマロが走ってくるのが見えた。近くにはゴンタもいた。

「あ、ルナちゃん一人とも来たみたいだよ

ミソラがルナに言つとキザマロとゴンタが息を切りながらスバルたちの近くに来た。

「はあはあ・・・い、委員長。ゴンタ君を連れてきましたよ」

「・・俺もう歩けねえぜ」

するとゴンタは地面に座った。

「ゴンター、あなたもいつになつたら遅刻ぐせが直るのよ」

「す、すまねえぜ・・」

ルナが気の遠くなるような説教を始めた。ルナの説教が始まつて少しすると先生たちがクラスのみんなを集めて出席をとり始めた。

「みんないるか？遅刻しているやつはないか～？」

「あれ？先生、緋哉君がいないようなんですか？」

先生が出席を取つているとスバルが竜牙が見あたらないことに気づいた。

「そりいえば竜牙の姿が見えないな。誰か知つてる人はいないか？」

みんなに聞くと校門の方からこっちに向かつて走つてくる人が見えた。

「はあはあ・・すみません・・遅れました・・」

「おい、緋哉遅いぞ。寝坊でもしたか？」

「はあ、まあ、そんな感じです」

緋哉は先生に理由を言つとスバルの近くに来た。

「おはよう。スバル君にみんな」

「おはよう緋哉君。珍しいね寝坊するなんて」

「うん。昨日こりこりあつて夜更かしあやつたんだよね」

「次から送れずに来なさいよ」

竜牙はルナの注意に軽く受け答えすると先生によばられたりしく先生のところに向かつた。

各クラスの出席確認が終わつたみたいで生徒たちはバスの中に入つていつた。

バスに乗ると先生が言った席に座つた。スバルの隣はミソラで、ツカサは緋哉の隣、キザマロはゴンタの、ジャックはルナの隣に座つた。クラスのみんなが席に座るとバスが動き出した。

「よし、リストイータウンまで時間があるからみんな自由にしていいぞ」

「ねえ、スバル君。リストイータウンひどいんだといふなんだろうね」

「うん、本で少し見たことがある程度だからよく分からぬいよ

「そのことなら僕にお任せを」

スバルとミソラが話していると前の席にいたキザマロがスバルたちのほうを向いてリストイータウンについて説明し始めた。

「リストイータウンは世界で有名な企業が沢山あるところです。僕らの持っているハンターも作られているそうですよ。そんな大企業がある中でアドミストという会社にループインフォメイションがあるんです。それから・・・」

「キ、キザマロ。リストイータウンについてだいたい分かったからもういいよ」

スバルはキザマロが暴走し始める前に話を止めた。キザマロは「そうですか」と言ってゴンタと話を始めた。

「・・・スバル君もああなることがあるよね」

「え、そうなの」

「うん。星について話し始めるとなるよ

「そうかな・・」

スバルとミソラはリストイータウンにつくまで楽しそうに話し始めた。

「リストイータウン」

リストイータウンにはいると周りは大きな会社が沢山あり多くの人が行き来していた。バスが駐車場にとまるときスバルたちがバスか

ら降りてきた。クラスごとに並び先生たちの指示を待つた。前には先生たちの近くにアドミストの従業員の人たちがいて何か話しているようだった。話が終わると先生が言った。

「みんな忘れ物はしていないな。これからしおりに書いてある通り各班に分かれてアドミストの人たちに中を案内してもらいます。自分たちが調べることをしつかり聞いたりするんだぞ。時間になつたらここに集合分かつたな?」

みんなは「はーい」と言うと班に分かれて案内してくれるアドミストの人たちに挨拶をし、中に入つていった。

「僕は西村さとし。僕が君たちの案内役であつてるよね?」

「はい。私は白金ルナと申します」

ルナにつづきスバル達も自己紹介をした。

「すまないね。本当はもう一人いればいいんだけど今はとても忙しくてね。それに、君たちと同じ団体が来ててね。迷子にならないように気をつけよ」

西村はスバルたちに言うとアドミストの中に入つていったのでスバルたちはあとについて行つた。

-アドミスト-

「ここが情報処理室。ここで、一ホン全国から送られてくる情報や映像などのデータを整理するところです」

西村に案内された部屋はコンピュータが百台近くあり従業員の人たちが画面と向き合ってキーボードを叩いていた。中には他にもスバルたちと同じ生徒たちもいた。

「うわー、機械が沢山ある」

「人も沢山いるね」

「今中に入つたら仕事の邪魔になるんじゃない?」

「そう言われてみればそうよな。西村さん他のどこのを案内してもらいますか」

「分かつた。じゃあ、いよいよまたあとで次いこつか」

それからスバル達は西村に他の部屋を案内してもらつた。廊下を歩いているとセキュリティーがとても厳しそうなところについた。

「このやきには午後に君たちが見学するループインフォメーションがあるんだ。」

「へえー、この先にあるんですね」

紺哉が言うとキザマロが「このセキュリティーシステムについて聞いた。西村が説明していると放送がなつた。

「あ、もうこんな時間かそろそろ昼食こじよつか。食堂室に案内するね。」

食堂室に移動しているときツカサが質問した。

「あの、西村さん。忙しいのにどうして一校同時に見学させてくれたんですか？」

「違う学校の人たちとも交流してもらいたくてね。なかなかうまくいかないんだけどね」

「そなんですか」

「ああ、ついたよ。ここが食堂室。ついたときに貰った券を使つてね」

スバルたちが中に入ると他の人も昼食を食べに来ていて沢山の人がいた。

「うわ、多すぎでしょ。」

「だったら、ジャック、ゴンタ。あなたたち席を取つておいて

「委員長そりやないぜ」

「何で俺も！？しかも俺らの分は？」

「だったら僕が貰つてきてあげるよ

ジャックとゴンタはツカサに券を渡すとしぶしぶ席を取りに言った。

スバルたちが昼食を貰うとジャックたちのところに行つた。席にはジャックたちのほかにも三人いた。

「あ、スバル君」

「アオイちゃん。それに雪磨君」

席にはアオイと雪磨、それとスバルより少し背の低い男の子がいた。

「えつと、そっちの人は？」

「ああ、前に言つたでしょ。雪島奏助君」

アオイは隣にいた男の子を紹介した。

「えつと、雪島奏助です。呼び方は自由でこよ」

「僕は星河スバル。よろしくね雪島君」

それから、ミンラたちも来ると雪島と挨拶をした。それから、スバル達は昼食を食べ始めた。

「ところで・・・アオイちゃんたちは・・・じいじ何をしてたの？」

「ソラちゃん、食べながら話すのやめた方がいいよ」

「はは、確かに。私たちのはじの一階にある「ノンピローター」を使って調べものをしてたの」

「へ～え、一階で調べ物が出来るんだ」

みんなは昼食を食べ終わるまで楽しく雑談をした。しばしあぐらかすと放送がかかった。

「「ダマ小学校の廊下と午後からの見学は一時半からです。集合場所は・・」

「あ、もう少し時間があるね」

「だったら、みんなでいろいろ見て回らない」

ツカサの意見に全員賛成して、食器などを持ち込むと食堂[室]から出て行った。

ループインフォメイション

あれから集合時間が来たのでアオイ達と別れて集合場所に向かった。クラスのみんなが集まると社長の西村さんが午後の案内を始めた。

「では、みなさん今から『アドミスト』が誇るループインフォメイションの部屋に案内します。」

西村は服のポケットからカードキーを出すと近くにあつた機械に通した。すると、ドアが音を立てて開くと目の前には円柱の形をした巨大な機械ループインフォメイションあつた。ループインフォメイションの周りには画面が沢山出ていて字がびっしりと書かれているものあれば映像がながれているのもあつた。

「このループインフォメイションは一秒に数百個のデータを処理し保存しています。ここで保存したデータはサテラポリスの捜査や裁判などで使われています。」

クラスのみんなが周りを見て回り始めたのでスバルたちも見て回つた。

「写真や本で見たのよりもやっぱり実物の方が大きいね」

「ツカサ君の言うとおりだね。やっぱ迫力が違うね」

「緋哉君、ツカサ君。話もいいけどちゃんと調べなさいよ」

ルナが一人が話しているのを注意すると話しを止めてしおりやノ

一トにメモを取り始めた。

「ん？ おこキザマロ。 これって何だ？」

ゴンタは近くにあつたボタンを見ながら言った。

「え、 ああ、 それは多分・・・」

キザマロが言いかけたとき他にクラスの人がゴンタにぶつかった。ぶつかった衝撃でゴンタがボタンを押した。すると警報が鳴り壁だつたところが開き中から警備口ボットが出てきた。警備口ボットの手からは電気が流れていて中にいた生徒たちを取り囲んだ。

「シンニコウシャハッケン。 シンニコウシャハッケン。 ハイジョ
シマス」

「な、 なんだこれ

「俺ら侵入者だつて。 それに排除されるみたいだね」

「緋戦君、 のんき言わないでください」

「ちよつといゴンタなにやつてるのよ。」

「いじゆうのは普通起こした人が何とかするよね？」

「ツカサのやうとおりだな。 おいゴンタ。 お前が何とかしない

「無理に決まってるだろーーー！」

「ゴンタは半分なきそうに叫んだ。ロボットが少しずつ近づいてきて今にも襲い掛かるうとしたときロボットに流れていった電流が消えて何事もなかつたようにもといた場所に戻つていった。

「みんな！」めんね。止めるのが少し遅れちゃつたね。大丈夫だつた？」

「は、はい。なんだつたんですか、今の・・・」

「ああ、ここにあるデータを引き出すのには暗号が必要でね。この中にあるデータは使い方を誤れば兵器に変わるからね。さつきのはこれとむらときのための防犯装置」

西村はループインフォメーションを指しながら説明した。するとルナが手を上げて質問した。

「あの、その暗号は誰が知ってるんですか？」

「こここの社長だけだよ。さつきも書つたとおり、こここのデータを使えば簡単に兵器に変わるからね。もちろん外部に漏れないようセキュリティーもしつかりしてるよ。」

西村はそう言つと「さて、そろそろ時間だからみんな出で」とみんなに声を掛けた。みんなが移動しているとき紺哉がループインフォメーションを見たまま動いていないのをスバルがきずいた。

「どうしたの紺哉君。みんな移動してるよ」

「え？・・あ、『めん、』『めん。ちゅうと』こここのデータが気になつてね」

「えいこへ。」

「やつれ、社長さんが言つたでしょ。『Iにあらデータは兵器に変わる』って」

「うん。それがどうかしたの？」

「おかしくないか？何でそんな物を一箇所にまとめておいてあるんだ？普通はばらばらにしたりしるんじゃないのか？」

「確かにそうだね。けど、ループインフオメイションが出来たのって、サテラポリスの捜査や裁判、過去に起きた犯罪とかを保存するためじゃないの？本にはそう書いてあつたけど」

「他にもあつたら？何かをするためにお偉いさんたちが一ホン全国のデータを集めてるとしたら？」

「まさか。そんな」とはなこと思つよ・・・

スバルは小さく笑いながら言つた。

「・・・うだよね。考えすぎだな

緋哉とスバルが話しているとソラが戻ってきた。

「一人ともなにしてゐる。ドア閉めるりじよ」

「あ、じめん。すぐに行へよ」

スバルは答えるとそのまま出口のドアに向かった。緋哉は少し田の前にあるループインフォメイションを見るとスバルたちのあとを追つた。

今は見学のときお世話になつた社員の人たちにお礼をいつている。お礼を言つるのはもちろん生徒会長であるルナだ。終わると西村が少し話すと、みんなは「今日はありがとうございました」と言つた。

スバルたちがバスに向かつて移動していくとき「アオイたちとあつた。

「お前らも今帰りか？」

「うん。来たときに乗つたバスのどこのむかうといふなの。ところで、雪島君の姿が見えないんだけど」

ミソラは辺りを見ながら言つた。

「ああ、あいつなりトイレだつてさ。中でこらと黙つぜ」

「ねえ、ついでだからこのままWAXAに行かない？」

「うーん。でも、これから学校に帰つてやることあるしね

「おい、その八人なにやつてるんだ。おいていくぞ」

「すみません。今行き・・・」

ルナが先生に言つてこるとアドミニストから警報が鳴り響いた。

スバル達はアドミストの方角を見ると従業員らしき人たちが急いで戻っていくのが見えた。

「・・・何かあったみたいだね」

「どうする？状況を聞きに行く？それともそのまま帰る？」

「緋哉君、そんなこと聞かなくても分かるでしょ」

ルナがあきれたように言った。

「行ってみよう。」

「だね」

「そうだろ？と思つたぜ」

スバルを先頭にアドミストに向かつた。

「おいおい、先生たちにはなにもいわずかよ。・・・せんせーい、アドミストがどうなつてゐるか気になるんで見てきます」

緋哉は少し先の方にいる先生に向かつて叫ぶとスバルたちのあとを追つて行つた。

-アドミスト-

社長の西村に状況を聞くため司令室に向かつた。司令室は見学のときに案内されたのですぐに行くことが出来た。途中、従業員たち

にぶつかつたりしてはぐれたときや途中立ち入り禁止の札が合った
が無視したり色々あつたがなんとか全員司令室に行くことが出来た。

「西村さん！」

「ん？ 君たちは確か・・・何でここにいる。ここは立ち入り禁止
だつたはずだぞ」

「それより、何があつたんですか？」

「アオイちゃんもいたのか。ループインフォメイションのなかに
大量のウイルスが発生したんだ。今コンピュータに組み込んである
ウイルス撃退用のプログラムを使ってテリートしているんだけどな。
・

「だけど？」

「数が減らないんだよ。テリートし始めて五分はたつているのに
ウイルスの数が減らないんだ」

「ウイルスの数が減らないって・・・まさか！」

「多分、スバル君の考えている通りだと思つよ

「行ってみるしかねえな」

「・・西村さんループインフォメイションのアクセスキーを貸し
てもらえませんか？」

「何を言つてるんだ。アオイちゃん、君だつて分かつてははずだ。

アクセスキーは渡せない

「でも、このままじゃ・・・」

ミソラはアオイの頼みを断つた西村に言いかけたとき放送がなった。誰かがかけているわけではなく自動でかかつたようだ。

「シャッターが降ります。付近にいる人は気をつけてください。シャッターが降ります。・・・」

放送がかかると今まで鳴っていた警報とは別のが鳴り響いた。すると、司令室の出入りのシャッターが降りた。

「え、ちよっと。閉じ込められた?」

「おい、どうなってる?」

ルナが叫ぶと西村は従業員の一人に聞いた。

「はい。ウイルスのせいで防犯用の装置が壊れたみたいです。それで、警備ロボ等が制御できません。さらに、ウイルスディリートの装置もそろそろ限界です」

「西村さん・・・」

考え込んでいた西村にアオイが言った。

「・・・渡したところでおたちになにが出来るんだ」

「僕達はサテラポリス遊撃隊です」

スバルが言うと西村はスバルの顔を見た。

「僕達が何とかしてみます。だから、アクセスキーを貸してください」

「・・君たちの名前を聞いたときに氣になつてはいたんだけど。
分かった。これがアクセスキーだ」

西村はスバルにアクセスキーを渡すと今度はみんなを順番に見た。

「君達も遊撃隊の一員なのかい？」

「私とキザマロ、それと紺哉君は違いますけどね」

「アオイちゃんきみもか・・」

西村は心配そうな顔でアオイを見た。アオイは笑顔で言った。

「気にしなくて大丈夫ですよ。それより、行こう。手遅れになる

「そうだね。電波変換」

スバル達は光に包まれるとそなばにはいなかつた。

メール

「ループインフォメイションの電腦」

「この電腦の中に入るとき、ループインフォメイションがある部屋を見ると警備ロボットたちが部屋から出て行くところを見たがウイルスを『テリー』するのが先と判断して電腦の中に入った。

「うーわ。いるね~」

「・・・異常だろ?」

宵磨が電波変換した姿は黄色のアーマーをつけた赤色の身体をしていて、名前はアレスレオパルド。手には大岩を簡単に碎くような両手剣を片手で持っていた。

「ウォーロック。装置がありそうなところ分からない?」

「分からん。ウイルスの数が多くすぎだ」

「装置のありそうなところが分かつたぞ」

「え、本当?」

アオイが宵磨に聞くとアレスが出てきた。

「ここから少し先に曲がり角があります。そことの間にここにいるウイルスとは違う周波数を感じます。やっぱり、『うみゅう』器用なことはお前には出来ないよな?ウォーロックちゃん」

「・・・てめえ、後で覚えてろよ」

ウォーロックは殺氣を放ちながら言った。スバル達は気にせずにウイルスを倒しながら先に進んだ。

「氷華連月」

「炎滅斬」

アオイは鉾を器用に振り、宵磨は炎を纏つた両手剣を振りウイルスを一気にテリートした。

「あの二人やるな」

「僕たちも負けてられないね」

スバルたちも一人に負けじとウイルスを倒していった。

「そこにいるウイルスの大群の中にあると思います」

「だつてさ。バーニングタワー」

宵磨は両手剣を振るとウイルス達の周りから三本の炎の柱が立った。宵磨の攻撃に続くようにスバルたちもウイルスの大群に向かつて攻撃した。煙がはれると、攻撃したところにはバリアに包まれた装置があつた。

「・・・なんか面倒な機能が追加されてやがるな」

「だね」

ジャックの言つたことにツカサが同意した。宵磨はいきなり装置に向かつて走り出すと、剣を装置に向かつて振つた。剣が装置に当たりとしたとき鈍い音がしたと思うと宵磨が弾き飛ばされた。宵磨は空中で体制を立て直してうまく着地した。

「おい、宵磨。さつきから無茶しすぎだ」

「悪いなジャック。けど、こつちは経験が少ないもんでね。それに、俺は手間のかかるやり方は嫌いなんだよね」

宵磨はそう言つと再び装置に切りかかつたがさつきと同じように弾き飛ばされた。

今度はスバルたちも攻撃したがバリアを壊すことは出来なかつた。

スバルたちが装置を壊そと攻撃をしている間さらに増えたウイルスは、ウィザードたちが何とかしていた。

「なかなか壊れないね、このバリアー」

「このままだと、まずいね」

スバルは同じウイルスを同時に攻撃できるシンクロフックを使ってウイルスを倒しているとハンターが鳴つた。

「こんなとこ・・・もしもし」

「スバル君、聞こえる?」

かけてきたのは司令室にいたルナで、とてもあわてていた。

「司令室で使つてたウイルスティリート用のプログラムが全部壊れ
たみたいな」

ルナは早口でスバルたちに今の状況が分かるように説明した。どうやら、西村達がウイルスをデリートするのに使つてた装置が壊れて守れなくなつたらしい。すると、アオイが叫んだ。

「もう一。いちも大変なのに。雪島君がいれば何とかなるかもし
れないの。どこにいるのよ。」

アオイが叫ぶと西村が聞いてきた。

「雪島の子も来ているのか？」

「あのやういへ。まさか、外にいるんじゃないだろうな」

「あの子が着てるなら。一いちで探して・見・・ザア・・る・
ザアアア・・」

西村が何か伝えよつとしたとき雑音が出てきて声が聞こえなくな
つた。

「西村さん！なんていつたんですかー？」

「回線が切られたみたいだね。外との連絡が取れなくなつてゐるよ

「一ツカサ君、後ろー。」

スバルがツカサに攻撃しようとしているウイルスに気がついた。ツカサはエレキソードを出すとウイルスを真っ二つに切った。

「大丈夫だよ」

「EJの程度のやついらに負けるわけないだろ」

ヒカルが言うとウイルスをテリートしていくた。

「・・ねえ。EJに装置があることは、これを置いた人がいることだよね？」

ミソラは言つと南磨がぶつきりほんに答えた。

「そうに決まってるだろ。機械が勝手に歩いてくるわけないだろ。それに、ここにセキュリティーが厳しいこと知ってるだろ」

「ひて」とは、セキュリティーにきずかねずに入ってきたひてこと？

「もうだと思つけど、それがどうかしたの？ミソラちゃん

「いや、ただね。西村さんが言つてたじやない。ループインフォメイションにウイルスが入つてきたって」

「・・電波体が入つてきたとは言つてなかつたね」

「うん。ちょっとそれが気になつてね。それに、こんなに広い電脳なのにウイルスもここにしかいないみたいだし」

スバルはミソラの言つたことを聞くと紹哉と話していたことが頭に入ってきた。

「……まさか。」

するとスバルはウイルスの大群の中から抜け出すと奥へ行こうとした。するどジャックが叫んだ。

「おい、スバル。どこに行く気だ」

「ちよ、ちよっと。スバル君」

スバルはそう言つと奥のほうへ進んでいった。アオイもウイルスの大群の中から抜け出しへスバルのあとを追つて行つた。
残つたミソラたちは、ともかく手分けをしてウイルスを倒していった。

「ちよつと、待つてよスバル君。どうしたの？」

「アオイちゃん。何で來たの」

「それより、いつたいどうしたの？ウイルスを倒さないといけないのに突然、奥に行つてくるとか言つて」

「そのことは行きながら説明するから。速く行こう」

スバルはそう言つと奥に向かつていった。アオイは「何なのよ」といながら追いかけた。

スバルたちが奥に進んでいると電波で出来た扉が道をふさいでいた。

「ウオーロック開けること出来る?」

「無理だな。暗号が分かつてたら何とかなりそうだがな」

「アオイちゃん、IJNの暗号知ってる?」

「知ってるわけないでしょ。で、なに。スバル君はこの先にあのやつかいな装置を置いた電波体がいるって思つてるの?」

スバルの考えはこうだった。ループインフォメイションのセキュリティーに気づかれずに装置を置いた電波体がそのまま帰るわけがない、ウイルスはおとりで目的はここデータだと考えているのだ。

「多分ね。それよりこの扉を何とかしないと」

すると、外との連絡が取れないのにハンターが鳴った。スバルは何で?と思しながらハンターをとつた。どうやらメールが送られてきたみたいだ。スバルは送られてきたメールを見ると電波で出来た扉に近づき暗号を打つた。

「スバル君。暗号が分からぬのに不用意にやつたら・・・」

アオイがスバルを止めようとしたとき「アンゴウカクーン。カイ

「ジョシマス」と言つ音声が聞こえたと思うと扉は消えていた。ウオーロックとアオイが畠然としているとスバルが言った。

「差出人不明のメールが来たんだけど、その中に暗号のことが書かれてたんだけど」

「どうやら、さつき送られてきたメールに暗号が書かれてらしい。解除した本人でもまさか本当に出来るとは思ってなかつたみたいだ。

「ともかく扉を開けることが出来たんですから速く行きましょう。ウィルスの方も大変そうだと思いますから」

「うん。行こう。」

やつと一人目のFM星人との戦闘です。

それではどうぞ。

扉を解除してスバルたちが奥に進むと巨大な装置があつた。装置の近くにはエアディスプレイを操作している黒いアーマを着けた黄色の電波体がいた。

「ビンゴだつたな。スバル」

ウォーロックがスバルに言つと電波体はスバルたちの方を向いた。

「・・・君たちは」

「私たちはサテラポリス遊撃隊です。そこで何をしてるんですか」

「ここには暗号式の扉があつたはずだけど」

「扉なら解除したよ。それより答えて。君はここで何をしているの？」

電波体はスバルの質問に答えずエアディスプレイを操作し始めた。アオイは再び電波体に聞こうとしたときウォーロックがさえぎつて言った。

「・・・おいでこよ。確か名前はリミスだつたよな」

電波体の近くに白のアーマを着けた黄色のウイザードが出てきた。

「名前を覚えてくれていたなんて光榮だね」

「悪いな。あいにく、周波数で判断したもんでは。名前は覚えてなかつぜ」

「あれ？ 周波数は消してたはずなんだけど。ま、いつか。こっちは僕のパートナーの・・・」

「ここの姿はリミスライティング。そういうえば、君たちの名前は？」

「私はアイスユニコーン」

「僕はロックマン。コミスって言つたよね。アンドロメダの設計図を盗んだのって・・・」

スバルが言つ前にリミスが言つた。

「僕達だよ。それがどうかした？」

「どうかした？ じゃねえだらうが！」

ウォーロックはリミスに向かつて怒鳴つた。

「・・・戦うのは嫌なんだけどな」

リミスライティングはそういうながら長剣を取り出すとスバルたちのほうに向き直つた。

「――ウーブバトル！ ライド・オン！」

スバルがリミストライティングと戦っているころ、ウイルスと戦っているミンラたちはもう、ギリギリの状態だった。

「・・・ もう限界」

「わすがに疲れた」

ミンラと直磨、ゴンタは今にも倒れそうな様子で戦っていた。その三人をカバーするように残りが戦っていた。

「くそ！スバルのやつ。ビリに行きやがった」

「・・・ 戦ってるな。」の周波数は・・コニスか

ジャックがボヤいているヒミツが言った。

「ジヒミー誰なの？そのリミスって」

ツカラサはウイルスを倒しながら言った。

「リミスは電気を操れでな。実力はまあまあだつたな。でも、面倒なところに現れたな」

「どうゆうことなんだ」

ジヒミーサンダーでウイルスを消し飛ばした後で、ヒカルが聞いた。

「簡単にゆうで。」のセキュリティーは全部あいつの手の内だ。もう使い物にならない

「セキュリティって防御用のも？」

「ああ。あのウイルスを出してくる装置のバリアは多分ここのだな」

「じゃあ何か。スバルがそのリミスとかゆつやつを何とかしないといこのウイルスどもは消えてくれないってか」

「そうゆうことだな」

「くそー！それまで戦わないといけないのか」

「もう俺、無理」

「おい、ゴンタ。もう少しがんばりやがれ・・・! しまった」

ジャックは不意をつかれたらしく防御に遅れた。ウイルスが攻撃したときレーザーがジャックの目の前を通り雨が降った。

「オメガレーザー」

「コッドレイン」

白を中心とした電波体と杖を持った電波体の攻撃で半分近くのウイルスがテリートされた。

「大丈夫？」

「遅れてしまなかつたな」

「遅すぎだ。姉ちゃん、暁」

そこにいたのは、暁が電波変換した姿のアシッドヒースとクインティアが電波変換したクインヴアルゴがいた。

「お前らは少し休んでて良いぞ。行くぞティア」

シドウはウイルスたちのほうを見ながら言った。

シドウたちが加勢に来る少し前、ロミスとの戦闘が始まった。

「電磁砲」

ロミスは周囲から電気を帯びた弾丸を出した。

「一人とも気をつけろください。弾丸と弾丸の間には電流が流れています。触れるだけでマヒします」

「電流なんて見えないよ」

「基本的に電流は弾丸との間にしか流れていらないはずです。弾丸を線で結んだときの図形の中を通らなければいいはずです」

「手合わせるのは初めてだが面倒な技だな

「来るよ」

リミスは剣を振ると弾丸がスバルたちに向かつてきた。スバルたちは左右に分かれて弾丸をかわした。

「・・・無駄だよ」

リミスライトニングが言うとかわした弾丸がスバルたちの方に向かつてきた。

「！追尾能力もついていたの？」

「打ち落とすしかないね。フリーズボール」

「プラチナメテオ」

メテオと氷の弾丸が電磁砲とぶつかり煙がたつた。煙がはれる前にリミスライトニングが斬りかかつてきた。スバルはエドギリブレードを出し受け止めた。

「悪いね。英雄だから手加減なんてするきないんでね。それに、一対一だからね」

リミスライトニングは鉢で攻撃しようとしていたアオイの方を見ると電磁砲を三角形が出来るように自分の前に出した。アオイは攻撃をしたが電流に防がれた。スバル達はリミスライトニングから距離を取つた。

「あの技、防御にも使えるんだね」

リミスライトニングは一人を順番に見ると何を思ったのか、構えを解くと小さな装置を出した。

「・・これはここに来る途中にあつた『リビルト』の防御プログ
ラムの制御装置だ。これを壊さないと破壊はできない」

「リビルト・・・あのウイルスを再構築する装置のことへ」

「そういえば、知らないんだっけ？」

「何でそんなことを教えてくれるの？」

「・・・・・」

リミスライティングは答へずスバルたちに斬りかかった。

それからミソラたちのところにシドウたちが援軍として駆けつ
まで斬つたり防御の繰り返しだった。

「だーあ、くそ、しぶといな

「こつちは一人がかりなのに、なかなか倒せないね」

「これじゃあ、時間だけがすぎていくだけだ。ウォーロック、ノ
イズはどうくらいたまつてる?」

「あの、もらつたPGMを使つんだな。ノイズ率は・・・・・」

「?..どひしたのウォーロック」

「ノイズがたまつてねえ」

「ビリヒ」

「ねえ、まことにあの制御装置を何とかしようよ」

リミスライティングが出した制御装置は巨大な装置とは真逆のところに浮かんでいた。

「・・・そうだね。けど、ビリヒよ」

「私とユーローンでコリミスライティングをなんとかしてみるから、その間にスバル君は制御装置をなんとかして」

アオイは言うとスバルの答えを聞かずコリミスライティングに向かつた。

「どうしたスバル。速くあの装置をぶつ壊すぞ」

「うん。そうだね。ソードファイター」

アオイとユーローンがリミスライティングと戦っているのを見ると剣を出すと制御装置に斬りかかった。以外にも制御装置は音を立ててあつさつ壊れた。

「簡単に壊れたね」

「壊れたな」

スバルたちの近くに制御装置の欠片が落ちたとき、アオイがスバルの近くに飛ばされたらしく倒れた。

「アオイちゃん！」

「おい、スバル。気を抜くな」

スバルがアオイのそばに駆け寄るとウォーロックはリミスライティングを見ながら言った。

「・・・・・」

リミスライティングは静かに剣をスバルに向けた。そのとき、リミスライティングの方から音が鳴るとエアディスプレイが出た。リミスライティングはエアディスプレイを操り始めた。

「・・・」
「・・・」

「ハローーってまさか！」

「ちんたらやつてられないな

スバルが構えるとリミスライティングが切りかかつってきた。ソードファイターを出しカウンターを狙っているとスバルとリミスライティングの間にレーザーが放たれた。二人とも距離を取りレーザーが放たれた方を見た。そこにはアシッドエース、ハープノートたちがいた。

「・・増援か。案外速いな」

「みんな、それに暁さん」

「スバル君、アオイちゃん大丈夫?」

「遅れですかなかつたな」

「よう。久し振りだな。リミス」

「ジエミーがハンターから出てきてコミスに言つた。

「ジエミーか。。。あのお前がそつちにつけたのか」

「話の途中で悪いがお前の目的はなんだ?」

「ジエミーとリミスが話していると曉がリミスに聞いた。

「田的つか。。。だいたいは想像つくでしょ

「やつぱり」のデータだったんだ。。。

「それにしても、一、二、三。。。十人か。さすがにそれに比べてこつちは俺とコミスだけ」

「ひどこと言つかなんと言つか。。。なんでこんなにいるんだよー」

「コミスライターングはこの状況ビデオするか考えているがリミスはいろいろ文句を言つていた。

「悪いな。恨まないでくれよ

「はあ~、どうじよっかな

暁はリミスライティングにてつとコロスライティングはため息を
つくと剣を構えた。

「いくぞー！」

感想等よろしくお願ひします。

逃走と謎

暁はスバルとアオイから相手の戦い方を聞き、みんなに指示を出すとロックオンソードでリミスライトニングとの距離を一気につめ斬りかかった。リミスライトニングは電磁砲を使い防いだ。するとジャックはリミスライトニングが暁に気を取られている間に後ろにまわった。

「あんな面倒な装置を作りやがって。くらいな、フェザーシックル」

ジャックの攻撃が当たりそうなとき、リミスが電磁砲で作ったバリアに防がれた。

「バーニングタワー」

「...リミス」

宵磨は剣を振りリミスライトニングの足元から炎の柱がでた。暁とジャックはリミスライトニングから距離をとることでかわし、リミスライトニングは炎が出ていない方に跳んだ。

「まだ！」

宵磨はツカサ達に向かつて叫んだ。

「「ジ...ミ...サンダー」」

「ショックノートフォルテッシモ」

ツカサとヒカル、ミソラの攻撃がリミスライティングに向かつていった。

「つち

リミスライティングは電磁砲でバリアを作ったが防ぎきれずに吹き飛ばされた。リミスライティングは空中で体制を立て直すとスバルたちのほうを向いた。

「くらいやがれ。アンガーパンチ」

「後ろか！」

ゴンタがリミスライティングに殴りかかった。リミスライティングは防御が遅れてまともにあたった。リミスライティングが立ち上がるときには頭上に雨雲が浮かんでいた。

「コットレイン

今度はリミスがバリアをはり攻撃を防いだ。

「大丈夫か？」

「大丈夫に見えるか？」

リミスライティングは立ち上がりながらいった。

暁たちはスバルとアオイの周りに集まつた。

「・・おかしいとおもわないか?」

「僕もね、思ってます」

「ねえ、スバル君何がおかしいの?」

暁の言つたことに答えたスバルにアオイが聞いてきた。後ろには宵磨も「何がおかしいんだ」と言いたげな様子だった。

「やつさ、私たちが攻撃したとき一度も反撃に出てなかつたじゃない」

「そういうえば、やつさから、防御しかしてないね」

「単に守るしか出来ないだけじゃない」

「そりだといいんだがな。ともかく速く終わらせよう。スバル、アオイ、いけるか?」

「はー」

「もう大丈夫です」

スバルとアオイそういう構えた。

「よし、一氣に行くぞ」

スバルはエドギリブレードを出し、アオイは鉾を構えた。

「・・コミス。一回このあたりをふつ飛ばしていいかな?」

「うーん、いいんじゃない。数多いし」

リミスライトニングは剣から電気を出し、スバルたちの方を向くと一気に距離を詰めた。スバルもリミスライトニングに攻撃しようとエドギリブレードで斬りかかった。スバルとリミスライトニングの剣が振り下ろされるとき、空気を切る音が鳴つたと思うとスバルとリミスライトニングの間に向かって数本の槍が飛んできた。その槍はスバル達の目の前に来ると光を放ち爆発した。

「スバル君!」

ミソラが叫ぶと煙の中からスバルとリミスライトニングが飛び出した。

「大丈夫かスバル?」

「はい、なんとか。それより今のは」

スバルがリミスライトニングのほうを見るとリミスライトニングは巨大な装置の方を見上げていた。

「どうしてここにいるんだ?スワイフト」

コミスが言うと装置の上から電波体ががリミスライトニングのそばに降りてきた。降りてきた電波体は緑色のロープを着ていて両手には白色の手袋をはめていた。隣には緑色の身体をしたウイザードが出ていた。

「その前に話題があるでしょ」

「・・まあ、礼は後で言つよ。それよりなんでいるの?」

「リーダーがなんだか君たちが大変そうだから手伝つてやつてくれって言われてきたの」

「・・ねえ、ウォーロック。あの、スワイフトって呼ばれてる電波体もFM星人?」

「ああ。また面倒なやつが来たな」

スバルとウォーロックが聞こえないように話をしたが、まだスワイフトはミスと話していた。

「それよりダメでしょ。まだ、データーのコピーもどつてないだろ?」。あなたの技はあたりを滅茶苦茶にしかねないんだから

リミスは「はいはい」といてスワイフトの話をまったく聞いていないうだつた。リミスライトニングはその横でエアディスプレイを操作していた。

「シドウ、どうするの?」

「話を聞くかぎりスワイフトってやつも仲間みたいだな。あの二人とも拘束するぞ」

シドウが言つとコミスライトニングがロープを着た電波体に言つた。

「えつと、確かモウメントスワイフトだったよね。」ペー終わったから逃げるの手伝ってくれない？」

「分かつたわ。そこから動かないでね」

スワイフトはそう言いつつリミスマライト一シングとモウメントスワイフトの足元に魔方陣が現れた。

「…まあいわ。逃げるつもりよ」

ハープの言葉に一番に反応して行動したのは暁だった。暁はロックオンソードで切りかかろうとしたが、リミスの電磁砲に邪魔をされた。魔方陣から光がするとスワイフトは「じゃあねー」と言いながら消えた。

「ハープ今のは？」

「スワイフトの転送技よ。たぶん、追いつけないわね」

「つち、逃がしたか」

「これからどうするんですか、暁さん？」

「ここはサテラポリスに任せてみんなは俺と一緒にWAXAに来てくれ」

暁がみんなに向つとツカサが暁に聞いた。

「あの暁さん。照矢君はどうしたんですか？」

「あ、やつこえばそうだ。あこつせびうしたんですか？」

宵磨も今気がついたようだった。

「照矢は家庭の事情でこられないとらしいから、WAXAに来てくれって言つてある。まあ、それより速く行くぞ」

「ちよつと待つてくださいよ。私たち学校の授業で来てるんですけど」

「俺がすでに話つてあるからその心配はないぞ」

「・・・職権乱用？」

「わあ～。違つんじゃないかな？」

アオイとミソラが曉に聞こえなによつて話していた。

「あ、それで。外にいるルナ達もWAXAに来るよつて話つてあるから連絡は取らなくていいぞ」

「私は少し遅れてこきますね」

「何か用事があるのかアオイ？」

「雪島君を探しに行きたいんですナビ」

アオイが言つと宵磨が「メールで伝えればいいじゃないか」と言った。アオイはハンターを出すとメールを打ち始めた。

「これでよしつと」

「外には報道人が沢山いるよつだから」のまま行くぞ」

暁が言つとスバル達は電腦から出て行つた。

-WAXA-

スバルたちがWAXAに来ると部屋にはヨイリー博士と照矢がいた。照矢はスバルたちを見つけるとアドミストにいけなかつたことを謝つた。スバル達は「用事があつたから仕方ないよ」と言うことで許すと、アドミストでの出来事を照矢に話した。だいたいの説明が終わると暁がルナたちを連れてきた。

「は～あ、酷い目にあつたわ」

ため息をつきながら入つてきたのはルナだった。

「何があつたの？」

「実はですね。スバル君たちと連絡が取れなくなつた後、閉まつてたドアが開いたんですよ」

「そしたら、いきなり警備ロボが入つてきて中にいた人全員が外に出されちゃつてね」

「外に出たら出たで報道の人たちに質問ぜめにあつたり、本当酷い目にあつたわ」

キザマロ、竜牙、ルナの順に説明した。ルナだけではなく一人とも疲れた様子だった。

「よし。雪島はまだ来てないみたいだが先に今日あったことについて話を聞かせてもらおうか」

暁が言うとスバル達は椅子に座りミスライティングとの戦闘、ウイルスを再構築する装置のことをリビルトと呼んでいたこと、データを盗まれたあげく逃げられたことを話した。

「スバル君やみんながいたのにはさり逃げちゃったの？」

「はい。その通りです」

ルナ言葉が効いたのか顔を下に向けて言った。

「ところでウォーロックちゃんたちに聞きたいんだけど、そのリミスとスワイフトについて教えてくれない？」

すると、ハンターからウォーロックとハープ、ジエミーが出てきた。

「リミスはたしかレチクル座のFM星人でジエミーと互角ぐらいいの力を持つてたよな」

「俺とあいつはFミ王の右腕がどっちかで戦つたことがあるぜ」

「スワイフトはエリダヌス座のFM星人で転送技が得意だったわ」

ウォーロックは「俺たちが知ってるのはこのくらいだ」と言うと

思い出したようにスバルが言った。

「そりゃ、リミライトニングとの戦闘中ノイズがぜんぜん
たまつてなかつたんですね」

「そんなはずはないだろウイルスをあんなに倒したんだぞ。たま
らない方がおかしいぞ」

スバルは「でも・・」と言いかけたが言葉を飲み込んだ。

戦闘中にノイズが異様なぐらい溜まつてなかつたこと、リミスラ
イトニングたちは盗んだ膨大なデータを何に使うのか。スバルた
ちがさまざまことを考えている中、沈黙が部屋を支配した。

逃走と謎（後書き）

ツリスとスウェイフトはもう少し有名な星座のほうがよかったです
かね？

感想、アドバイスよろしくお願いします。

理由

静かになつた部屋ではスバルたちが考へに没頭していた。

「・・・あのさあ。なんなのこの空気」

スバルたちは声のした方を見ると雪島がいた。

「あれ、雪島君いつの間にいたの?」

雪島がいつ来たのか誰も気づかなかつたようで全員驚いていた。
アオイは椅子から立ち上がり雪島に近づいた。

「どうしたの、遅かつたね?」

「僕は学校があつたんだよ。時間は掛かるよ」

「君が雪島君だね。俺はサテラポリスの暁シドウだ」

雪島は「雪島宗助です・・・」と話したくないようになんか簡単に言つた。

「ところでも。今来たばかりで何も知らないんだけど」

「あ、えっと。全部話していいかな?」

アオイはスバルたちに確認を取ると雪島に電波変換が出来る「」といふことを説明した。

「へへえ。君がロックマンだったんだ。事情は分かつたけどそれ

だけでここに呼んだ分けないよね」

雪島はスバルに向かつて関心したように言つと暁たちに聞いた。

「実はFM星人たちがリビルトつて言つ装置を作つてゐみたいでな。その装置の解析を手伝つてほしんだ」

「・・なんで僕なんですか?ここに担当の人たちがいるでしょう」

「実はね、アドミストで盗まれたデータ回収を優先することになつて、人手がたりなくなつてゐるよ」

ヨイリー博士が申し訳なさそうに言つとツカサが言つた。

「え、 そうなんですか」

「だから、人為不足で解析が進まないから君に手伝つてもらいたいんだ。アオイと宵磨の話を聞いたところいと思つんだが、どうだ?やつてくれるか?」

暁は雪島の顔色をうかがいながら話した。だが、雪島はさつきと変わらず話したくないような様子だった。

「・・それつてサテラポリスのためつてことですか?」

「一応そうなるが

「なら手伝いません」

暁が答えると即答した。アオイ以外はまさか断るとは思わなかつ

たよつで驚いていた。

「おい、雪島なんで断るんだよ。なんでサテラポリスに協力しないんだよ」

「それに、その言い方だとサテラポリスには協力したくないって言つてるもんだぞ」

「やつはさすだけど」

宵磨のあとにジャックが言つと雪島は冷たく言つた。すると見ていたスバルが口を開いた。

「ねえ、なんでサテラポリスに協力してくれないの？」

スバルが言つと雪島の表情が変わり何も言わなくなつた。雪島の印象は悪い方にしか向いてない。しかも暁やヨイリー博士は話すのが初めてなのでいい印象を持つことは出来ないようだ。誰もしゃべらなくなり嫌な空気が辺りを包んだ。

「ねえ、やつぱりダメなの？」

「やつぱりして、どうゆうじ？」

雪島がアオイに聞くとスバルが言つた。

「ねえ、だつたら僕たちを手伝つてくれない？ サテラポリスのためじやなくて僕たちのために」

スバルの言葉に続くようにアオイも言つた。

「そうだよ。私たちのために力を貸してくれない?」

アオイは真直ぐ雪島を見ながら言った。雪島はため息をつくと「信用はあるなよ」と言つてヨイリー博士の方を向いた。

「あの、その装置のあるところに案内してくれませんか?」

「え、分かつたわ」

ヨイリー博士と雪島は部屋を出て行きドアが閉まるのを見るヒルナが言った。

「何なのよ彼! 腹が立つわ」

「まったくですね。協力も断つてなにを考えてるんですかね」

「スバルもなんで協力してくれるようになに言つたんだ?」

「なんでだろ。サテラポリスに協力してほしつて言つたとき誰も信じてないような顔をしてたから」

「似てるからね。スバル君に」

「どうゆうこと?..」

アオイが言つたことが気になつたらしくミソラが聞いた。アオイは自分が言つたことを後悔したように話そつか話すまいか考えた。アオイは「」とは雪島君には言わないでね」と念を押しと話し始めた。

「実は彼の父親ね三年前に突然いなくなつたの。それで、学校でいじめを受けてね。一時学校に来なくなつたときもあつたわね」

「そりなの？」

スバルは宵磨の方を見る宵磨は「そんなこともあつたな」と言つていた。

「雪島くんつてスバル君に似てるね。とにかく、雪島君が学校に来るようになしたのつてアオイちゃんたち?」

ツカサはスバルと似た境遇の雪島に興味を持つたようだ。

「あの時が一番苦労したな」

「うん。探すのにも苦労したよね」

宵磨とアオイは雪島を学校に来させようとしたときのことを思い出していくよつて話した。

「とにかく雪島君はどうしてサテラポリスを嫌つてるんですか?」

キザマロはアオイに聞くとアオイは表情を暗くした。

「あれ、もしかしてお前知ってるのか?あいつが断つた理由」

アオイは表情を暗くしたままつづいた。

「実はね。雪島君、父親がいなくなつた後、警察に探してもひづ

ように頼みに言つたらしいのよ。でも、「そんなことに取り合つている暇はないんだ」や「少しの間いなくなつただけだろ。すぐに戻つてくるわ」って言われて相手にされなかつたみたいなの」「

「それがサテラポリスを嫌う理由と何か関係あるのか」

暁も嫌われている理由が知りたいよつて言つた。

「それから、一週間ぐらいあと警察じゅらちが明かないから、サテラポリスに行つたのそしたら」

「・・・そこでも相手にされなかつたか」

「うん。そんなことは警察に頼めばいいだろつて言われたらしいよ。それでも、何度もサテラポリスに行つたけど同じことの繰り返しだったのよ。だから、民間人を守るはずの組織が人一人も探してくれず正義を語つてるのが協力を断つた理由だと思うよ」

アオイの説明が終わるとみんな押し黙つていた。雪島のサテラポリスを嫌う理由を知らなかつたにしろ言い過ぎたと反省しているみたいだつた。そんな中でミソラがアオイに聞いた。

「ねえ、雪島君の母親は？」

「・・死んだらしいよ。事故死だつたみたい。雪島君の父親がいなくなつたのは母親の葬儀が終わつた二日目ぐらい経つた後らしいよ。捨てられたよつに突然に。だからよけいにね」

「母親が死んだすぐ後に父親が行方不明。捜索願いを出したが完全無視。サテラポリスを嫌いになるわけだね。後警察も」

「アオイが雪島の母親のこと話をした後、ツカサが静かに言った。

「アオイは何で雪島のこと知ってるんだ」

「雪島君を学校に来させるときに西村さん聞いたの。だから、このことは言わないでね」

アオイが念を押すよつこいつとやひこいつが部屋を包んだ。
アオイは「え、え」とあちこち見た。

「えっと、暗くなつたから気分変えて、事件や雪島君のこと以外
の話しない?」

宵磨は「別の話つてな・・・」とぼやいていた。すると//ソラセ「あ、そうだった」と言つてポケットからチケットを出すとみんな
に一枚ずつ配つた。

「これは?」

「来週ある私のライブのチケットだよ」

「あ、そつか。来週だつたんだよね」

「ソラセ、アオイちゃん後これ

//ソラセはアオイにまたチケットを渡した。

「え、私も持つてるけど」

「違うよ。雪島君に渡しておいて。予備を持ってきてよかつた」

ミソラは笑顔で言つてアオイは「ありがとう」と言つた。

「さて、今日はもう解散だ。来てくれてありがとうございます。気をつけ
て帰れよ」

暁はやつとスバル達は「よろんな」と言つて部屋から出て
行つた。

「ジャック。お前は下にいるクインティアを手伝ってくれ」

ジャックは「またかよ」と言つと部屋から出て行つた。暁はジャ
ックが出て行くのを見ると大きなため息をつくと椅子に座つた。ハ
ンターからアシッドが出てきた。

「どうしたんですか？疲れがたまつていましたか？」

アシッドは暁に体調のことと聞くと暁は椅子にもたれかかると力
をなくしたように言つた。

「違う。いろいろあってな

「やつきのアオイさんのお話ですか？」

アシッドはやつきのアオイが話していた雪島の過去のことを語
った。暁は何も言わずただアシッドの言つことを聞いていた。

「・・・世の中はシドウ、あなたやスバルさんのような人ばかりで

はないことを知ってるはずですよ。このサテラポリスで働いている人たちも

「どうやら暁は捜索願いを無視してきた自分たちサテラポリスのことを考えていいようだつた。

「そんなことは分かつてゐる。スバルのような正義感を持つてゐる者ばかりが揃つてゐるのは奇跡だと思つてゐるよ。だがな・・」

「今、考えていても仕方ないですよ。それより今は地球に来ているFM星人のことを考えましょう」

「それもそうだな」

暁は何かを振り切つたような顔になつて言つた。すると部屋のドアが開き長官が入つてきた。長官の近くには別の人気がいた。

「・・暁君。君に話しがあるんだが」

夜。倉庫のような暗いところにFM星人五体が集まつていた。

「で、データーは取つてきたが尻尾を巻いて逃げてきたんだな」

サイレントがリミスを馬鹿にするように笑いながら言つた。リミスはサイレントを無視して黙つていた。すると、スワイフトが言った。

「なに戦つていないやつがいろいろ言つてるの」

「まあ、結果オーライってことでいいんじゃないの？それで、次は誰が行くの？」

「その前にリミスお前のパートナーにやつてもうこたいことがあるんだが・・」

リーダがリミスに言つとリミスは「やつてもういたいこと？」と言つとリーダは笑つていた。

理由（後書き）

「おやつたらみなれるのよ」で上野に書かんでしょうか？

感想等よろしくお願ひします

似たもの回十

「//スライトーングとの戦闘から一週間後。スバル達はオクダマスタジオに来ていた。

「それにしても、ここも久し振りだね」

「そうよね。前は事件があつて大変だったけど今回はないでしょうね」

「あ、みんなこいつら、こいつら」

スバルたちが話してくると//ソラがいつもその服装で近づいてきた。

「あれ、みんな来てるかと思ったけど、緋哉君と宵磨君、雪島君は？」

「緋哉君と宵磨君は用事があつたみたいで、ライブ開始までには来るつて。雪島君はリビルトの解析があるらしいけどすぐこ来るらしいよ」

ツカサが三人がい理由を//ソラに説明した。//ソラは「そつか」と言った。

「そうこいや、宵磨のやつ用事があるとき多くねえか？」

「そういうわけでみればそうですね。何かあるんでしょうか？」

ジャックが独り言のようになつとキザマロが同意するように言つ

た。

「そういうえばまだ言つてなかつたっけ」

「？アオイちゃん何か知つてるの」

ミソラがアオイに言つとスバルたちに話し始めた。

「宵磨くんね、今、家の家計が苦しいようなの。それで、少しでも楽にわせようとしてバイトしてくるの」

「バ、バイト…？」

「そんなこと僕たちに言つていいの？」

ツカサがアオイに言つと笑顔で言つた。

「スバル君たちなら言わないでしょ」

「そうなんだ。じゃあ、私、練習があるからみんなは館内を見学していく」

ミソラはスバルたちに言つとアオイは「私もついていい？」
とミソラに聞くと許可をもらひミソラと一緒にオクダマスタジオの中に入つていった。

「私たちも中に入りましょ」

ルナが先頭でスバルたちも中に入つていった。

アオイはミソラに向かって樂屋に入ると中にある沢山の衣装などに夢中になった。

「うわ～。こんな衣装があるんだ。あ、このも可愛いな。
こののもこいな」

ミソラは衣装に着替え鏡の前で髪を整えていた。アオイはミソラの近くにある椅子に座つてミソラを見ていた。

「ねえ、ミソラがしてスバル君のことが好きなの？」

アオイがミソラに爆弾発言をすると一瞬沈黙が部屋を包んだ。ミソラは顔を真っ赤にしながら髪を整えていた。

「ミソラちゃん。髪がグシャグシャになってるよ」

ミソラはグシャグシャになつた髪を整えようとするとアオイがミソラのクシを持ち髪を整え始めた。ミソラはまだ顔が真っ赤だった。

「（アオイちゃんといふことに平気で聞こえてきたつか～）」

「でも、どうなの？」

「……え、えっと」

ミソラが途惑つてこととノックが聞こえた。

「ミソラちゃん。それから、練習始めるからよろしくへへ」

ミソラが返事をするとアオイは残念そうにため息をついた。

「あ～あ。いいところだったのに。ま、がんばってね」

ミソラは静かに頷いた。

ミソラとアオイが話しているとき、スバル達は・・・

「ミソラちゃんの最後のライブか」

「何だ?えらく残念そっだが?」

スバルは浦方に会い、ルナや照矢は案内をしてもうつたが、スバルは屋上に行けるようになったことを浦方に聞き屋上に向かつていった。

「うん。ミソラちゃんはまた始めるって言つてたけど、なんかね・
・」

「まあ、ミソラのやつが決めたことだからな。仕方ないんじやねえか?」

ウォーロックは続けて「俺は暇だから寝るわ。何かあつたら起こしてくれ」と言い残すとハンターの中に戻つていった。スバルは屋上に出ると手すりに寄りかかり空を見上げた。しばらくは静かに空を見ていたが屋上のドアが開き、ドアのそばには雪島がいた。

「スバル君。どうしてここにいるの?」

「あれ、雪島君。来るの速かつたんだね」

「うん。それにしてもこのウイザードって結構仕事熱心だね」

「？何かあったの？」

雪島は苦笑しながら話し始めた。

「いや実は、アオイのやつライブに来ないかってメールが来たと思つたら、チケットや入館証が送られてきてないし、そのおかげで足止めをされて」

「じ、自分で誘つといて肝心な物を渡してないって」

スバルも苦笑しながら言つた。雪島も手すりに寄りかかると町の方を見た。

「あ、あの雪島君・・・」

「どうしたのスバル君？」

雪島が聞いてきてもスバルはなかなか話を切り出せなかつた。

「雪島君のお父さんって・・・」

雪島は静かにスバルをじつと見た。雪島はため息をつくとまた町の方を見た。

「アオイからだる。西村さんが話したつて言つてたからね。一人

とも口が軽いと云つた。それがどうかした?」

「いや、ただ僕と似てるなと思つて」

雪島は何も言わずただ静かにスバルの話を聞いていた。

「アオイちゃんに聞いたと思つけど、僕の父さんも行方不明になつたときがあつてね。それで絆を作るのが怖くなつて学校に行かなくなつたんだ。でも、委員長やみんなが僕をまた学校に行けるようにしてくれたんだ」

「・・簡単に僕達は似たもの同士つてことかな?」

「あ分ね。だからさ、その、何も出来ないと思つたビ僕も雪島君の父さんを探すのを手伝つよ」

スバルが話し終わると雪島はドアの方へ歩き出した。ドアを開けると雪島は言つた。

「ありがと。気持ちだけ受け取つとくよ。君と話が出来てよかつた」

雪島はスバルに伝えるとドアを閉めた。が、すぐに開いた。

「あ、そうさつ。伝えることが一つ。リビルトの解析結果が終わつたからヨイリー博士の方からメールが届いているはずだよ」

スバルはハンターを見ると確かにヨイリー博士からメールが来ていた。

「（・・・ウォーロック、メールの管理ぐらこしてよ）」

「それとアオイちゃんとミソラちゃんからの伝言。歌の練習がもうすぐ始まるから早く来てだって。僕は先にいってるね」

雪島は「練習は特設ステージであるらしいよ」と付け足して言つと館内に降りていった。

「え、ちよ、ちよっと。先にそりやつことを教えてよ」

スバルはそりやつと屋上から降りていった。

スバルが特設ステージに来ると練習が始まつていて浦方や監督をはじめルナや竜牙達全員がいた。

「スバル君、遅いわよ」

「『めん。あれ、竜牙いつ来たの?』

「つこさつき。それにしても、忘れてちゃいけないだろ」

スバルは謝ると「謝るならミソラちゃんに謝れば?」と言われた。スバルはステージの方を見るとスバルが来たことに気がついたようで笑顔で歌つているミソラがいた。

「それにしても、本当に歌上手だね。ミソラちゃんは、何だか嫌なことを全部忘るような気がするよ」

「照矢君もそう思つ?」

「ソーラの歌を聞いていると照矢がスバルに言った。

「まえにあつたここのライブは『ティーラー』って組織が妨害したけどうまくいったんでしょ？」

「うん。けど、今度はそんなことさせなこと思ひよ」

「そうだね」

スバルは元気に歌っているソーラを見ながら言つた。
スタジオにいる誰もが何もなくつましくと思つていた。潜む陰
に気づかずに。

「響ソーラのライブね〜」

オクダマスタジオの並木道。黒い服にジーパンを穿いた青年が興
味のなさそうにチケットを見ていた。近くにはさそりに似た紫色の
ウイザードがいた。ウイザードは低い声でコーヴァスのように笑つ
ていた。

「で、そのロックマンってのはソーラのビートなんだ。サイレント
？」

サイレント。青年はウイザードのことをやつ呼んだ。サイレント
はまだ笑いながら言つた。

「話を聞く限り、餓鬼のようだぜ。確か名前は星河スバルだった

かな

青年は「ふ～ん」と期待はずれのよつすで言つとチケットを捨てた。すると、ニヤツと笑つて静かに言つた。その声はさつきと別人のような冷たく低い声で言つた。

「子どもが。ハハハ、楽しめるだろ?」

「地球のやつらが、英雄だと言つてるんだ、楽しめるだろ? 血祭りにあげてやろ? ゼ西杉」

西杉と呼ばれた青年はポケットから鍵の形をしたものを取り出すと言つた。

「それにしてもだ。ライブで沢山人が来ると殺さずお前らが好きな負の心とかゆうのを集めるとは面倒なこったな」

鍵の形をしたものを作りと館内へ歩いていった。

似たもの回し（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

- オクダマスタジオ 特設ステージ -

「よし。上出来だ。本番もこの調子でがんばっててくれよ」

監督はミソラにそう呟つと館内へ戻つて行つた。ミソラは練習で疲れたのかその場に座つた。そんなミソラに浦方が飲み物やタオルを持つていった。

「お疲れさん。うまくいってたよ。本番もがんばってな」

「はい。ありがとうございます」

ミソラはお礼を言ひと受け取つた。スバルたちもミソラの方へ行つた。

「ミソラはお礼を言ひと受け取つた。スバルたちもミソラの方へ行つた。

「わちがミソラちやんだぜ」

キザマロとゴンタは絶賛しまくつていた。スバルは浦方に挨拶した。

「お久し振りです。浦方さん」

「あ、スバルじゃないか。久し振りだな」

「スバル君」

浦方と話しているとミソラが呼んだ。

「どうだった？うまくいった？」

「うん。上手だったよ」

スバルに褒められたミソラはとてもうれしそうな顔になつた。

「よし、ミソラは本番までまだあるから衣装を着替えてきていいぜ」

浦方に返事すると楽屋に戻つていった。

「じゃあ、スバル。俺も仕事に戻るからライブまで中についていからな」

浦方はそう言い残すと館内へ入つていった。

「なあ、飲み物を買いに行かねえか？」

「もう。練習なのにあんなに声を出すからよ」

ルナは「コンタが言つたことに呆れながらいた。照矢と竜牙の二人は中を見て周るようで一緒に入つていった。ルナ、キザマロ、ゴンタとなぜかジャックは飲み物を買いに行くのに自動販売機を探しに言つた。アオイは雪島をつれてどこかに行つた。

「さて、外にでも行こうかな」

スバルは外の並木道に向かつた。

スバルが外に出ると近くから怒鳴り声が聞こえた。

「てめえー今なんていいやがった！？もういつぺん行つてみるよ」
声が聞こえた方を見るといかにも不良っぽい男の人が青年に突っ掛かつっていた。青年は平然とした表情のまま怒鳴つてきた男に言った。

「当たつただけで金を払えとか言ひ馬鹿に渡す金はないね。さつさと済えたら？」

「言わせておけば！」

男が殴りかかるうとしたとき青年の表情が一変した。スバルはその表情を見たとき恐怖した。相手が誰であろうと容赦なしに叩き潰す。相手が動かなくなるまで。そんな、冷酷な目つきに変わった。そのとき、警備ウィザードが来た。

「あなた達何をしてるんですか！？今すぐに止めなさい」

男は殴るのを止め舌打ちするどどこかに行つてしまつた。スバルは青年の方を見るとあれ？と思つた。

「（田つきが元に戻つてる？）

スバルは目を見ただけで恐怖した青年田つきが一瞬で変わつたことに驚いているようだ。警備ウィザードは事情を青年に聞こうとし

たとき無視して怒鳴つた男と同じくオクダマスタジオから出て行つた。

「（あの人何者だつたんだろう・・・）」

スバルが考えていると後ろから名前を呼ばれた。振りむくといつものピンクの服を着たミソラがいた。

「何か騒ぎがあつたみたいだけど、大丈夫だつた？」

「うん。大丈夫だつたよ」

「よかつた。じゃあさ、ライブが始まるまでさ一緒にいろいろな所見て周らない？少し工事したらしくて前來たときなかつた場所があるからさ」

「いいけど」

「じゃ、行こう」

ミソラはスバルの手を握ると駆け出した。スバルは「ちょ、ちょ」と言いながら引きずられるように行つた。

「裏道」

オクダマスタジオで騒ぎを起した男が仲間らしい一人の男の近くに行つた。

「おう、遅かったな。菓子でも買いに行くとか言っておいて何があつたのか？」

男の一人はタバコを吸いながら言った。

「どこのやううはしらねえが一回ぶん殴つてやううかと思つたけどよ、邪魔がはいつちまつて殴れなかつたぜ」

「だつたら、今から俺たちもついていつボコボコにして金でも脅し取るか？」

もう一人の男はゲームをやめて面白そうな顔で言った。

「お、面白こと言うね。そいつの泣き顔で謝罪している姿を見るのは面白そうだな」

三人は笑いながら「違ひねえ」と言った。そんな笑い声が響く裏道で誰かの歩く音がこだました。三人の前には話しに出てきた青年が立っていた。

「お、いっしつから出向く必要がなくなつたな」

三人の不良は笑いながら青年の周りを囲んだ。

「いこなら、田撃者なし。止められる必要なし」

青年はそういうと不良の一人が言った。

「おい、兄ちゃん。こんなところに何のよつかね？もしかして俺たちにお金をくれるとかかな？」

すると不良全員が笑い出した。青年の表情はスバルが恐怖を覚えた表情になつて静かに楽しそうと言つた。

「せめて、時間まではがんばって足搔いてくれよ」

言つのが早いか青年は笑つていた不良一人に殴りかかった。青年のストレートは腹にクリティカルヒットしたらしく笑うのをやめてうずくまつた。残りの不良たちは声を上げると青年に襲い掛かつた。青年は冷酷に楽しそうな目で殴りかかった。

-オクダマスタジオ-

「あ、ミソラちゃん。そろそろ準備に行つたほうがいいんじゃないの？」

スバルとミソラはオクダマスタジオの屋上にいた。スバルは言うとミソラは残念そうな顔になつたが、「絶対、最後まで見てよ」と言つと楽屋に走つていつた。スバルは「もちろんだよ」と楽屋に向かつて走つていくミソラに行つた。ドアが閉まるとスバルは夕日の沈む町の方を見た。しばらくすると寝ていたウォーロックがハンタ一から出てきた。

「あーよく寝たぜ」

「おはようオーロック」

「お、もうこんな時間なのか？スバルそろそろ下に降りてツカサ

たちと合流した方がいいんじゃないのか?」

入り口の方を見るとライブを見に来た人たちが並んでいた。

「うん、そうだね」

スバルはウォーロックに立つと下に降りていった。

-裏道-

スバルがみんなと合流するのに屋上から降りた頃。夕日が沈み始めて回りはなんとか見えるほど暗さになっていた。近くには影が一つ積み上げられるように倒れていた。近くからは人が謝っている声が聞こえるか聞こえないぐらいの小ささで誰かが言っていた。

「おい、立ちなよ。もうすぐしあがいてくれよ。楽しみが終わっちゃまじじゃないか」

どうやら青年が三人の不良と乱闘した結果不良たちが負けたようだ。いや、状況を見ると弱いものいじめを不良たちがやられていたと言った方がいいようだった。つまっていた二人は顔がはれ上がりていてとても立つことが出来る状態ではなく気絶していた。

青年は残りの不良の胸倉を掴んで面白そうなようすで言っていた。不良に関しては死んだような顔で涙の後が残っていた。青年は舌打ちをするとき飛ばし腹を何度も蹴った。

何度か蹴ると青年のハンターからウィザードが出てきた。

「おい、西杉。時間だそろそろやめる。仕掛けが出来なくなっち
まう」

不良を蹴っていた青年、西杉は舌打ちをすると手を放した。掴ま
れた不良は力なく倒れた。そんな状況を見向きもしないで歩き出し
た。

ライブが行われるオクダマスタジオへ。

ライブ開始

一オクダマスタジオ 特設ステージ -

スバルはあれから無事にツカサ、ルナたちと合流した。スバルが行くと宵磨が来ていた。それから楽しく話しながら会場へ向かった。特設ステージは、前回ステージの場所を高くしたため対処が出来なかつたため、今回のステージは高いところではしないようだ。

「それにしても予想以上に人が多いね」

ツカサが周りを見渡して言った。辺りはすでにミンカラファンの人たちで埋まっていた。ついでに、スバルたちの席は当然最前列だ。

「多すぎだろ？ 隣は隣で煩いのがいるし」

ジャックは隣で叫んでいたゴンタとキザマロを見ながら呆れたようになつた。

「ちよつと、ジャック。うるさいよ」

「ちよつと待て！ なんで俺なんだ！ ？ 普通俺の隣だろ！」

平然と言つたアオイにジャックは言つと「なんとなく」とさうつと言つた。スバル達は苦笑しながらそのやり取りを見ていた。

「けどライブが始まつてここにいる全員が叫び始めたらやたらうるさいような」

宵磨が言つと『コンタとキザマロが同時に「つるさい」とは何ですか！？「うるさいことわ」と詰め寄るようになつた。宵磨は「悪かつた、悪かつた」と言つていた。すると辺りを照らしていた電灯が全部消えた。一瞬闇が支配したがスポットライトが舞台を照らすと笑顔のミソラがいた。

ミソラがいるのを見た観客は一気に歓声を上げ会場はあつという間に歓声に包まれた。ミソラは手を振るとマイクを持つていつた。

「みんな～こんばんわ～。今日は私のライブに来てくれてありがとう。知つてる人もいると思うけど今日のこのライブが終わつたら私は引退します。けど、必ずまた戻つてきます。そんな訳で今日はいつも以上に盛り上げていくよ」

ミソラが引退と言つたとき歓声とは別に残念そうな声も聞こえたが言い終わると歌が始まつてないのにさらに歓声が強くなつた。

「じゃあ、早速一曲田じきます。今日初めの曲は『ハートウーハー』いくよ」

ミソラがギターを構えると歌いだした。始まると共に歓声も強くなつた。スバルたちは『コンタ、キザマロ、さらにアオイとルナまで夢中に応援していだ。

「引退ライブか・・」

スポットライトが辺りを照らしているところとは逆の暗いところで青年、西杉がこれから起ころる楽しい出来事を待ち望む子供のような不気味な表情で言った。

「くくく・・その歓声が悲鳴に変えるのが楽しみだぜ」

「おい、西杉。準備が出来たぞ。速くいかねえか?」

西杉ははづなずくと裏の方に歩いていった。

一曲目のハートウーブが終わり観客の歓声がさらに大きくなつていた。ジャックはあまりにもついていけず外に出たようだ。

「みんなーまだいける?」

ミソラが元気に聞くと答えるよつこ「おー」と歓声が上がつた。

「じゃあ、一曲目『絆ウーブ』いくよー」

ギターを弾きだし一曲目に入った。一曲目の中間ぐらいまで来るとスバルは自分のハンターがなつているのに気がついた。どうやらメールが届いていたみたいだつた。差出人は不明で、前アドミストで送られてきたのとそつくりなのが来ていた。

スバルはいいところなのにと思いながらメールを小さな声で読んだ。

「えっと・・・『会場の裏。速く行かないと後悔することになるぞ』って、え?」

メールの内容に驚いたスバルは行こうとしたが、歌つているミソラを見た。スバルは「ごめん。少し席をはずすね」とおしゃくよう

西杉は会場を出た。

スバルが会場から出たこと気づいたらしくウォーロックが来た。

「おい、どうした？ 最後までいるんじゃなかつたのか？」

スバルはウォーロックにメールを見せるとウォーロックは「なるほどな」と言いながらうなずいた。

「ガセかもしれないぜ？ 本当だつたとしても何があるのか分からないが行くんだろ？」

「うん。せつかくのライブを邪魔されたらたまらないからね」

スバルは指定された場所へ走つて行つた。

「はあ～。おこおい、警備のやつが一人もいなつてビリゅうつ」とだよ？」

西杉はおこしてある装置を見ながらまらなそうに言った。

「まあ、いいんじゃないか？ それより、速く始めないか？」

サイレントは不気味な笑みを浮かべていった。

「おし。じやあ早速この会場を爆発・・

西杉が言いかけたとき近くの林から子供の声が聞こえた。

「ねえ、ウォーロックこの辺りだよね？」

「ああ、けどなにもないな」

スバルたちが道に出ると西杉と目が合った。スバルは西杉の姿を確認すると「あれ、たしかあのときの」と言つたとき隣にいたサイレントに気がついた。ウォーロックはスバルに耳打ちをした。

「おい、スバル。ビリやら当たりみたいだぜ。あいつをそり座のサイレントだ」

「つてことはFM星人？」

スバルはウォーロックに確認を取ると西杉を見た。

「おい、誰だお前？ こんなところに何かよつか？」

喧嘩を売りそうな声でスバルに言つた。

「ハハハ、ちょうどいいところに来たな。ウォーロック。おい、西杉こいつらがあのロックマンだ」

西杉はその一言を聞くと笑みを浮かべた。

「このライブ会場を爆破する前にお前を倒すか」

「ば、爆破つて・・」

西杉は近くにあつた装置を手で叩きながら言った。

「こここの装置のスイッチを押すとこここのライブ会場に仕込んだ爆弾がドンー中にいる人が混乱している中にさりに岩を落としたり大混乱させ、湧き出る負のエネルギーをこいつが吸収・・」

「おいおい。しゃべりすぎだらう。それ以上しゃべるな

サイレントは西杉が計画をペラペラ話し鍵の形をしたものを見出したときにストップをかけた。

「それは・・アンドロメダの鍵!-?」

「出来上がるのが速くねえか?」

「話はここまで。わあい、始めようかね

西杉はスバルたちを無視して装置のスイッチを押そうとした。

「ー!スバルあれを押されたら

「分かつてゐる。電波変換

スバルはロックマンの姿に変わると西杉を止めようと周波数変換で近づいた。西杉はいきなりスバルの方に向き直った。その顔は予想通りといわんばかりのようすで笑っていた。

「やつぱりそつ来るよな。さつき言つたはずだぜ?先にお前を倒すつてな!電波変換

スバルは突然の行動に距離を取つた。西杉の姿は、黒い身体に紫色のアーマを着けていた。両手には短剣を持っていた。

「この姿はクレイムサイレント。さあ、始めようぜー！」

「来るぞスバル！」

「うん。ウェーブバトル！ライド・オン！」

スバルが戦闘を始めたころ。

「ああ、飛ばしていくよ～」

ライブの盛り上がりは落ちる」となく活気に溢れていた。照矢は疲れたようで外に出ようとした。

「あれ、どうしたの照矢君？」

「ちょっと外の空気吸つてくる」

照矢はツカサに言うと外に出て行つた。ルナやゴンタアオイたちはもちろん気がついてない。

照矢は外に出ると大きく息を吸つた。ハンターからはディムネスが出てきていた。

「大丈夫ですか？まだ、体調はよくないんでしょ？」

「ハハハ・・そ、うなんだけね。なんか夢中になっちゃって。いろいろな事忘れてさ。それと、敬語はやめてくれウイザードなんだからわ」

照矢はそう言つとまた深呼吸をした。ふと近くにあつたベンチを見ると誰かが寝ているのが見えた。照矢は目を凝らしてみるとビックリ。ジャックのようだつた。

「あれ、こ、んなとこりで何してるの?・ジャック

ジャックは手をどけ照矢の姿を確認すると起き上がつた。

「お前こそビーッした?・ライブ終わつたのか?」

「まだ終わつてないよ。僕はちょっと外の空気が吸いたくなつてね

「俺は寝てた。終わるまでここにいるつもりだから終わつたら起こしてくれ」

ジャックはそう言つとまた寝だした。照矢「分かったよ」と言つと。デイムネスに「飲み物買つに行かない?」と言つと歩き出した。

「で、わざわざ向でこんなところに来るのかな?」

デイムネスは呆れながら言つた。今、照矢達は人影がない準備室近くのところに来ていた。

「別にいいだろ。表の方はいいのがなかつたんだから」

照矢はそう言いながら紅茶を買つた。買つた紅茶を飲むとため息をついた。

「大体考へてることは分かるけど、スバルたちにも手伝つてもらつた方がいいのでわ？」

「本当に敬語やめてよ。まあ考へてみるよ。・・・あれ？」

照矢は飲み終わつたペットボトルを近くにあつたゴミ箱に捨てようとしたとき何かが入つてゐる紙袋を見つけた。

「これなんだろ？ 忘れ物かな？」

照矢は紙袋を持つてデイムネスに聞いた。デイムネスは「さあ」と言つと紙袋の中を見た。照矢は勝手に見るデイムネスを止めようとしたがいきなりデイムネスに「紙袋をそつと置いて」と言われた。照矢は言われたとおりにするとデイムネスに聞いた。

「どうしたの急に？」

デイムネスは紙袋の中を見せた。照矢はそれを見ると驚いた。その中にはパネルが液体の入つた容器と「コード」のようなものでつながつてゐる装置が入つていた。パネルには5・00と浮かんでいた。

「ねえ、これつてもしかして・・」

「多分考へているものであつてゐると思います。うかつに触らないでくださいね。本物のようですから」

「解体できるへ。」

「一〇の程度ならすぐ出来ます。ただ、オクダマスタジオのいたるところにありますね」

デイムネスは装置を取り出し解体しながら言った。

「どれくらいあるの？」

「一〇数個ですね。連動式のようですから場所はすでに分かっています」

「今はライブ中だし止めるのもなんかな。何とかしてみるか

デイムネスは「終わりました」というと照矢は残りの場所を聞くと走っていった。

ファイナライズ 失敗？

スバルは西杉が電波変換した姿、クレイムサイレントと戦っていた。戦況はスバルの方が押されていた。

「おらおら、その程度なのかー!?」

スバルは西杉の短剣での連続攻撃をロングソードで防いでいた。

「（この人暁さんと同じぐらい速い。それに・・体が重い）」

西杉はスバルを弾き飛ばすと追撃を加えてきた。スバルはとっさに防御チップのバリアで防いだ。お互いがウェーブロードに立つとウォーロックがスバルに言った。

「おい、スバルどうした? このままだと負けるぞー!？」

「分かってるけど・・」

スバルがウォーロックに向つて西杉が笑い出した。

「ハハハ、体がうまく動かないんだろ? そりやそうだ、お前の周りの電波を悪くしてんだから」

「おいてめえ! 卑怯だぞ。それに、スバルの周りの電波が悪けりゃお前らの動きも鈍つてるはずだわ!」

ウォーロックは笑つてゐる西杉に怒鳴つた。西杉は表情を変えずに言った。

「何寝ぼけたこと言つてんだ？その装置に対応できるプログラムを組み込んでおけばいい話だろ」

西杉の話を聞くと「卑怯なやつめ」と吐き捨てるよう言った。スバルは苦しそうなよつすだった。西杉は笑つのをやめると短剣を回した。

「弱いものいじめつては何もしてこないやつを思つ存分殴つたりするんだぜ？弱らせたりするのは当たり前だろ」

西杉は短剣をまわすのを止めるとスバルの方に向けた。

「さて、どこまで楽しめるかな

西杉はそういうなり周波数変換でスバルの目の前に移動した。スバルはバトルチップは間に合わないと判断し距離を取ろうとした。

「無双連斬」

西杉は一瞬でスバルの後ろに立つていた。スバルは驚いて振り向いたとき体中に激痛が走った。バイザーが割れていて肩や手など切り傷が出来ていて血が出ていた。

スバルは一瞬倒れかけたがなんとか持ちこたえ距離を取つた。今度はさつきより遠く。スバルの息は荒く血が片目に入つた。

「おいスバル、大丈夫か？」

「な、何とか…」

スバルは西杉の方を見ると楽しそうに短剣を回していた。隣にはサイレントが出ていた。

「リミスと俺らは違うぜ。容赦する気はねえぜ」

「次はどう切り刻んでやるつか?」

西杉は不気味な笑みを浮かべながら次のことを考えていた。スバルはサイレント達に聞こえないようにウォーロックに聞いた。

「ノイズはどうくらい溜まってる?」

「200%超えてるぞ、やるか?」

「それしかいい方法が思いつかないからね」

スバルは立ち上がると西杉の方を見た。西杉は短剣を回すのを止め構えた。

「ファイナライズ!」

スバルはそう叫ぶとノイズがスバルを包み込む・・・はずだった。

「あれ?」

スバルの姿は変わらずノイズもスバルを包み込まなかつた。西杉は呆気に取られていたが笑い出した。

「何だよ。『ファイナライズ』って叫ぶもんだから何が起こるか

と思えば、失敗か？それは残念だつたな

「どうして…」

スバルはなぜファイナライズが出来なかつたのか考えていた。そのため、西杉が近づいていることに気がつかなかつた。

「まだ、終わつてもないのに敵から目をそらして言い分けないだろー！」

西杉の声でスバルは我に返ると西杉は目の前に来ていた。

「簡単にやらせるかよ。ビーストスティング！」

西杉がスバルを斬りうとしたときウォーロックが自慢の爪で攻撃した。西杉は突然のことでの防御が間に合わずまともにくらつた。

「スバル考えるのは後にしろー！」

スバルは頷くと次の攻撃に備えた。西杉は立ち上がると表情が昼間の冷酷な顔になつていた。

「くそが。何も出来ないやつが攻撃しやがつて！」

西杉はサイレントを呼ぶとサイレントは「やつと俺も戦えるのか」と言った。

スバルを睨むと短剣で斬りかかつた。ウォーロックはさつきと同じように決めてやろうかと構えていたがサイレントが西杉の上から飛び掛つた。ウエーロックはそのままもめ合いに入った。

「へや、さきやがれ

「（僕を切るためには最低体に触れなければならぬはず。だつたら）」

「（僕を切るためには最低体に触れなければならぬはず。だつたら）」

スバルは一枚のバトルチップを使つた。

「ハリケーンダンス」

スバルはその場で風を纏いながら回転し始めた。

「よし、これなら切る」とはできねえだろ

「そうだな。回転している間わな

サイレントは静かに言つとウオーロックは「なに?」と言つた。スバルの回転は徐々に弱まっていき止まつた。スバルは片目で前を確認すると笑みを浮かべていた西杉が立っていた。スバルは驚いてバトルチップを使おうとしたが遅かった。西杉の姿はもうなく気がついた時には痛みと衝撃で倒れた。

「フェイントをかけてなかつたら俺がやられてたが、まあいいや

西杉はそんなことを言いながら体から血が出ているスバルに歩いて行つた。

「（へや、立たなきやいけないのに体が動かない）」

「子供でも知ってる」と教えてやるよ。サソリには毒があるんだぜ？」

西杉はスバルを見下ろしながら冷たく言った。

「くそー毒か」

「氣づくのが遅かつたな。あの短剣に毒が塗つてあるぜ。もうあのガキは動けないぜ」

ウォーロックが言つたことにサイレンとは馬鹿にするより言つた。ウォーロックは「くそがー」と叫ぶとスバルの方へ向かおうとしたがサイレントが邪魔をした。

「わっしきのお返しだ」

西杉は今までの攻撃や電波の悪戯、サイレントの毒で動けないスバルを蹴飛ばした。スバルは地面に何度も体をぶつけた。西杉はスバルの方へと歩いていった。

「おら、どうした? もう終わりか?」

西杉はスバルの背中を踏みつけた後、何度も腹を蹴った。ウォーロックは助けに行こうとしたがサイレントに押さえつけられて助けに行くことが出来ない。

スバルは蹴られるたびに呻き声を出した。西杉はそんなスバルにお構いなしに何度も蹴つた。

「やっぱり、弱いものいじめはいけないよね」

西杉は蹴るのを止めるとスバルの首を持つと投げ飛ばした。スバルはウォーロックの近くまで投げられた。ウォーロックはスバルの近くに駆け寄るとバトルチップの中ならリカバリーを使おうとした。

「あ、リカバリー使うんなら使えば？ どうなつても知らないけど」

「どうゆうことだ？」

ウォーロックは恐ろしい形相で言つた。サイレントは笑みを浮かべながら言つた。

「ドクリンゴットバトルカード知つてるか？」

ウォーロックはそれを聞くなりリカバリーを使うのをやめ舌打ちをした。

ドクリンゴトは体力を回復するバトルチップ、リカバリーなどを逆にダメージを与える効果に変えるバトルカード。この場合、リカバリーを使うと傷を治すのではなく逆にスバルをさらに苦しめることになる。

「さて、そろそろ爆破しますか」

西杉は装置のボタンを押すため近づいていった。ウォーロックは「止めろ！」と叫ぶなり襲い掛かつた。ウォーロックの攻撃はサイレントによつて簡単に弾き飛ばされた。

それを見ると西杉は装置のボタンを押した。

スバルは氣を失いそうな様子でボタンを押した西杉の姿を見た。スバルとウォーロックは「しまった」と思つていたがどうにもならなかつた。西杉とサイレントは騒ぎになるのを今かと待ち望むような様子で館内の方を見た。が、騒ぎになるどころか爆弾が爆発した

音すら聞こえなかつた。

「おい、どうゆう」とだ? 騒ぎが起るやうに爆発をえしない
じゃないか」

「知るかそんなの!」

西杉とサイレントは言い争いをしていた。

「くそーちゃんと爆弾は仕掛けたはずなんだが」

「うつたら、あいつをボコボコにしてやる」

西杉はスバルの方を見ると歩いてきた。スバルは立ち上がりつつとするが体が動かず声しか出せない。

ウォーロックはスバルを守るように前に出た。西杉とサイレントは冷酷な笑みを浮かべながら歩くのを止めない。スバルとウォーロックが諦めかけたとき空気を切るような音が聞こえたと思いつと西杉の肩に矢が刺さっていた。

西杉は突然の攻撃をくらい矢が刺さってる方の方を抑えた。サイレントが矢を抜くと西杉は矢の飛んできた方を見た。

「誰だ! ? どこのいるー? 出て来い」

西杉が叫ぶと後ろから矢が一本飛んできた。今度は一本は切ることが出来たがもう一本は足をかすつた。西杉は見えない敵に腹を立て始めていた。

「西杉、下じゃない上だ!」

サイレントが言った方を見ると空には星と一緒に無数の羽があり
襲い掛かった。

「つちー」

西杉はバックステップでかわすと辺りには無数の羽が地面に刺さ
っていた。西杉が顔を上げるとスバルの近くに翼をはやし弓を持つ
た灰色の電波体がウエーブロードから降りてきた。

ファイナライズ 失敗？（後書き）

最後に現れた灰色の電波体が誰なのは分かりますよね？

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

空の狩り人

スバルは自分のそばに電波体が降りてきたのを見ると氣を失った。ウォーロックはそばに立つている灰色の電波体に隙を見せないよう構えていた。が、ハンターから出てきたウイザードを見ると警戒心が解けた。

「ディムネスお前か」

「二人とも大丈夫ですか？」

「気を失ってるだけだね。ディムネス、スバル君とウォーロックをお願い」

照矢はスバルが無事なことを確認すると奥のほうで獲物を狙つているような顔つきをした西杉を見た。西杉は恐ろしく不気味な気を放っていた。照矢にはそれが西村を包み込んでいるように見えたが、動搖はしなかつた。

「・・・おい、てめえ何者だ？」

「サテラポリス遊撃隊。スカイディムネス」

お互い相手の動きを見ながら静かに言った。

「まさかと思うが、お前が爆弾を壊したのか？」

「飲み物を買いに行つたら物騒なものを見つけたんでね。悪いけど全部使い物にならなくしたよ」

「俺の楽しみを全部無駄にしやがって！」

照矢の話を聞くなりさつきの冷酷な顔と違ひ怒りの形相になつて、怒鳴つた。西杉は短剣を構えるなり襲い掛かつた。スカイディムネス、照矢はスバルを担ぎ離れたところへ周波数変換で移動した。

「ディムネス。バリアをはつて」

照矢はそういうと空へ跳んだ。ディムネスは言われたとおりバリアをはつた。

照矢空へ飛ぶと暗くなつた林を見まわした。一瞬静けさが辺りを包み込むと何かを感じたのか照矢は後ろを見た。そこには周波数変換で近づいてきている西杉がいた。

「実戦は始めてなのに全力で来られてもな

「だつたらお前もあそこで倒れているやつの一の舞にさせてやるぜ」

照矢は距離を取ろうとバックステップをしたとき、西杉はいなくなつていた。

「・・・！」

照矢は突然、周波数変換で違うウェーブロードへ移動した。移動したとき照矢の肩にかすれ傷が付いていた。西杉はさつきまで照矢がいたところに立っていた。隣にはハンターから出てきたサイレンともいた。

「今のかわすか

「つち。運のいいやつだ。次ははずさねえぞ」

サイレントはやるなと思つていたが、西杉はともかく気が晴れるまで叩き潰すことしか考えてないようだ。

「（速いな。今のはあいつの言ひおり殺氣だけでもうまくかわせたもんだからな）」

照矢は立ち上がりながら勝つための作戦を考えていた。

「（こつちは初めての戦闘。まともにやつて勝てる相手ではないな。さて、どうじよつかな・・）」

照矢はティムネスの方を見ると何か言いたげな様子だった。しかし、ティムネスを見たのがあだになり西杉が向かってきていた。

「よそ見してると終わりだぜ」

照矢は落ち着いた様子で弓の弦を伸ばしたすると薄緑色の矢が出来ていた。

「ウイングシコード」

弦を離すと風を纏つた矢が西杉に飛んでいった。西杉は鼻で笑うと走りながら軽々とよけた。

照矢は次の矢を放つため弦を引いたが西杉のほうが少し速かつた。

「今度こそ終わりだ。無双連斬！」

照矢は構えたまま周波数変換で上のウェーブロードに移動した。かすり傷が数箇所あつたがたいしたことはなさそうだった。

照矢は移動するなり矢を放った。西杉は上からの攻撃に反応が遅れたがなんとかかわした。

「ここの程度の攻撃じゃあ、勝てないぜ」

西杉は挑発も含めたような言い方で言つた。西杉はそのまま照矢に向かつていつた。今度は突っ込んで技を放たずスバルの時と同じようにフェイントをかけた。照矢はバックステップでかわしたこと

が失敗だと言つことに気がついた時は西杉は攻撃の構えをしていた。

「今度こそ終わりだ！無双連」

西杉が言いかけたとき肩を何かが貫いた。西杉は何が起こったか理解できぬ様子だったがサイレントの叫び声が入つた。

「上だ！よける」

動くよりも早く突き飛ばされた感覚を感じた。西杉はさつきまでいたところを見ると切り刻まれた跡みたいなのがあり、薄緑の矢が刺さっていた。西杉は肩の方を見ると地面に刺さっていたのと同じ矢が刺さっていた。

「ここれは、あいつがあの時放った矢か？」

西杉は矢を不器用に抜きながら聞いた。サイレントはバリアを張つていてるディムネスの方を見た。

「まさか、あの『ティムネス』か。つち、甘く見るんじやなかつた。
おい西杉、あいつの矢はかわすんじやなく消さなきやいつまでも追
つてくれるぞ」

「・・・矢を操る能力か」

西杉は照矢を睨みながら言つた。照矢は表情を変えず『』の弦を引
いていた。

「気づかれるの速いな。・・・ちょっとやってみようかな」

照矢はそういふと西杉の視界から消えた。

「炎双斬撃」

西杉はそう言つなり短剣は炎を吹いた。短剣が炎を纏うなり後ろ
に振つた。何をやつてるんだとウォーロックは思つたが、何かが炎
に包まれた。西杉が見ている先には照矢がいた。

「あいつ見向きもしないで矢を切つたのか」

「ちよつとやばいかな？」

ティムネスが心配そうに言つと「ちよつと行つてくるから後よろ
しく」と言い残し照矢の方へ向かつた。照矢は周波数を連續で使い
そのつど矢を放つてゐるようだ。照矢は周波数変換でどこかに移動
すると今度は西杉の全方位から矢が襲い掛かつた。

西杉は笑みを浮かべると矢を全て一瞬で切つた。矢は炎に包まれ
ると地面に落ちながら消えていった。

「おい！もう終わりなのか？」

西杉は辺りを見渡しながら言った。

「（あれで無傷か。早くスバルを病院に連れて行きたいんだけどな）」

照矢は木に隠れながらあれこれ考へていると、ディムネスが来ていた。余計な話は省くようでいきなり本題に入った。

「矢は私が操るんで操作に気をとられなくていいですよ」

「じゃ、任せる」

照矢はウェーブロードに立っている西杉に向かつて無数の矢を放つた。

「…来たか」

西杉が見た方には無数の矢が向かつてきていた。

「おい、また矢かよ。本人が出てこいよ」

つまらなさそうに言つと短剣を構えた。矢にタイミングを合わせて振ると今度は炎に包まれなかつた。矢は急に方向を変え八方に飛び散つた。西杉はどうゆうことだと疑問に思い飛んでいつた矢を見ると向きをまた西杉の方に変えた。今度は直線的にではなく意思を持つたように向かつてきた。

「くそ！なんだよ。急に切れなくなつた」

西杉は短剣を振りまわしながら襲い掛かってくる矢をかわした。致命的なダメージは与えてないがかすり傷がどんどん増えていつていた。そんな中、西杉は足に矢がまともに当たつてしまい倒れた。このチャンスを見過ごすまいと矢が一斉に襲い掛かった。西杉は舌打ちすると周波数変換でかわした。見つからないように地面に移動したのがつかの間、照矢の声が聞こえた。

「決まつてくれ。ウイングストライク！」

上を見るとなつきの矢と比べ物にならない数の羽が向かってきていた。

矢の攻撃を受けたばかりで対処に間に合わず全ての羽が襲いかかつた。西杉がいたところは砂煙に包まれていた。

照矢とティムネスはスバルの近くに降りるとウォーロックに容体を聞いた。スバルはすでに電波変換は解けていてもとの姿に戻っていた。

「止血はした。それよりお前らもやるな。そういうえばティミスは俺が地球に来る前は『空の狩り人』だったか」

「昔の話はまた今度で。それよりスバルさんを速く治療した方が」

「」の時間だとこの辺りの病院は無理だと思つから、やつぱりWAXAだね」

ティムネスとウォーロックがスバルを抱えると照矢は砂煙のあがつているところを見た。砂煙は晴れていてそこには羽が刺さつたド

ーム状の壁があつた。

照矢たちは再び警戒すると壁はバラバラに砕けた。中からは不機嫌な表情をした西杉とサイレントがいた。

「はい、そこまでー」

サイレントたちが出てくるとウーブロードの方から声が聞こえた。照矢たちは声のした方を見るといつにはアドミストのときによく来たスワイフトがいた。

「おい！何でまたお前が来てるんだー？」

「何でって『リードされそだつたから』のと

スワイフトは片手に持っていた袋を見せた。袋の中は機械の残骸などが入っていた。

「あんたが勝手に持ち出したこれの回収。まつたく、回収に來たらこんなどうしようもない形になつてたし、リーダーからば『リートされそだつたら助けろつて言われてるし最悪だよ』

スワイフトは騒ぐよつと真剣な表情に変え周波数変換で西杉の近くまで移動した。

「つてことで、撤退するわよ。分かつてると恩つけど拒否権はないから」

言い返そとする西杉とサイレントを無理やり魔方陣の中に入れた。ロープを着た電波体、モウメントスワイフトは照矢のほうを一瞬見るとアドミストのときのように光に包まれ消えた。

空の狩り人（後書き）

アオイと宵磨と比べて遅くなりましたが照矢の始めての戦闘でした。

感想等よろしくお願いします。

—特設ステージ—

「今日はみんな来てくれてありがとうございます。今日を持って引退しようと思います。けど、また戻ってくるのでそれまで待ってください」

ライブ最後の曲が終わり客の歓声は最高潮に達していた。観客の中には泣いている人もいた。ミンラは観客のみんなに挨拶をすると舞台から降りて行った。

「はあ～

「どうしたの？ため息なんか付いて

今、ミンラは楽屋に戻つて休んでいた。スポーツドリンクを少し呑むとミンラはため息を付いた。ハープに理由を聞かれたがうつむいていて答えようとしたしなかった。そもそも聞こえてないようだった。

「・・・もしかしてスバル君？」

ハープの一言でミンラは顔を上げた。ハープはやつぱりねと言つ顔をしていた。

「確かに途中からどこかに行つていたわね。何があったのかしら？」

ミンラは「何で最後までいてくれなかつたんだろう」と呟いてい

た。するとドアがノックされてミソラが返事をするとルナたちが入ってきた。外で寝ていたジャックも一緒にいた。どうやらルナたちにたたき起されたようで顔には晴れた痕があった。

「みんな」

「今日のライブは最高でしたよ//ルナちゃん」

「うん。聞いてるしつつも楽しけりやった」

「疲れが吹っ飛んだ」

「うお~、本当に引退しちまつのか?まだ歌つてほしいぜ~」

キザマロ、アオイ、宵磨、ゴンタの順で言った。ゴンタに関してはまだ泣いていた。そんなゴンタにルナは「いい加減にしなさい」と言いながら呟いた。

みんなは笑っていたがアオイはミソラが少し元気がないことに気づいたようだつた。そして、今この氣づいたように竜牙が言った。

「そろそろスバル君に照矢君がいなくなつてるね」

竜牙が言うとルナたちは辺りを見回して「そろそろそりだね」などといつていた。雪島は「夢中になりすぎだわ~」と聞こえないよひに言つた。

「確かに何処に行つたんだろうね」

「スバルは知らねえが照矢なら飲み物を買ってくるとか行つてたが

ツカサが言つた後、ジャックがぶつきりぱりに言った。

「あこつら//フランちゃんの最後のライブだつて言つのに最後までいなになんて許せねえぜ」

「そうですね。せつかくチケットまでもらつたのに最後までいなになんてありえませんよね」

ゴンタとキザマロがそう言つていると竜牙と雪島は「ならジャックはどうなんだよ」などとつっこみを入れていた。ミソラはみんなのやり取りを落ち着きのないように聞いていた。アオイがミソラに話を振ろうとしたときドアがまたノックされると聞き覚えのある声が聞こえた。

「暁だ。ミソラにジャックやみんないるか？入るぞ」

ドアが開くとサテラポリスの服装をした暁がいた。暁は好物のうまい棒をサクサクと音を立てながら食べていた。暁はスバル、照矢以外が揃っていることを確認するとうまい棒を食べるのを止めた。

「みんなこんな遅い時間だがWAXAに来れるか？」

時計を見ると九時になりそuddつた。ルナ、キザマロ、ゴンタは行けないらしいが他は行けると答えるとツカサが「何があつたんですか」と聞いた。

「実はな照矢の報告でライブ中にFM星人が現れたらしいんだ。スバルと照矢がなんとかやつたみたいだがスワイフトも現れて逃げられたらしい。それで、今後のこと話をしたいんだが」

「スバル君は？」

暁の話にいち早く反応したのはミソラだった。ライブを途中で出て戻つてこなかつたことを考へると大体の想像は付いているらしい。暁は言葉に一瞬詰まつたが答えた。

「命に別状はないらしい。ただ、体中の打撲などが酷いらしくて今WAXAにいる」

暁の話を聞くなりミソラは楽屋から出て行つた。アオイやツカサたちもそれにつられるよつと出て行つた。暁は仕方ないと言ったげな様子で後を追つた。

—WAXA 医務室—

スバルは目を覚ますとまず白い壁、天井が見えた。スバルはここは何処だろう？何でここにいるのだろうと考えていたが、すぐに思い出したように体を勢いよく起こした。すると、腹の辺りに激痛が起つたときに押さえた。隣に座つて本を読んでいた照矢が気づいてスバルをベットに寝かせた。

「あ、ダメだよ。打撲や長い間、電波の状況が悪かつたせいで体中が痛んでいる見たいなんだから、体を起こしたりせずに横になつてないと」

スバルは横になると照矢にお礼を言った。

「それにしても気がついてよかつた。」には、WAXAの医務室。
ウォーロックは・・・

照矢が説明しているときなりスバルのハンターからウォーロックが出てきた。

「やつと田を覚ましたかスバル」

スバルはウォーロックと簡単に話を終わらせると照屋のほうに顔を向けた。

「そういうえば、ライブはどうなったの？あと、翼のある電波体が来たと思つけどサイレン特はどうなったの？」

「えっと、一つずつ答えていくよ。まず、翼のある電波体は多分僕ね。サイレンとはスウィフトとか言つた電波体が来てうまく逃げられちゃつたよ。次にライブの方なんだけど無事に終わつたらしいよ」

スバルは心配そうな顔つきで聞いていたがライブが無事に終わつたことを聞くと安心したようだ。照矢の話が終わるとウォーロックが気になつていていたことを照矢に聞いた。

「ところでお前は体とか大丈夫なのか？電波を悪くしたつてあいつらが言つてたが。それに、毒も効いてなかつたようだが」

「ああ、そのこと。デイミスはね周波数じゃなくて周りの電波を感じしたり少しだけど操ることが出来るらしいんだ。爆弾は電波で操作する仕組みだったからその回路を調べてもらつて何とかしたんだ。で、電波を悪くしていった根元を見つけて破壊したんだ」

照矢はウォーロックの質問にさりげなく答えた。スバルはなんとか理解できたがウォーロックにとっては理解ギリギリのようだった。照矢は気にせずに話を進めた。

「毒はステータスガードって言えば分かるかな」

スバルとウォーロックはなるほどと頷いていた。

ステータスガードは毒などの状態異常にはならなくなる能力。つまり、照矢の電波変換した姿、スカイディムネスにはサイレントの毒は効かないと言つことだ。

「まだ話していないことがあるから話を戻すね。それで、スバル君をここに連れて来る間、暁さんに連絡したんだけど、ミソラちゃんたちを連れてくるらしいよ。もうすぐかな」

照矢は壁にあつた時計を見ていつた。

- ? ? ? -

スバルが目覚めたころいつも暗い倉庫の中には五体の電波体がいた。中ではサイレンなどがスワイフトに怒鳴つていた。

「どうしてあんな奴からひかなければならなかつたんだ！？」

「勝手にリミスの装置を持ち出して壊したんだから何もいえないでしょ」

スワイフトとは別に興味のなさそうな様子で見ていたウィザード

が言つた。声が聞こえたのか矛先はその電波体に変わつた。

「うるせえんだよレイド！ 地球の生活に興味を持つて計画に協力してない奴が」

レイドと呼ばれた電波体はサイレントの方を見向きもしないで話を変えた。サイレントの我が儘は、もはや全員から無視されていた。堪忍袋が爆発したようで他の四体の電波体に向かつて叫んだ。

「もう我慢できねえ。俺は俺のやり方で地球を侵略してやる。アンドロメダの鍵は今は俺たちが持つてるからな」

サイレントはあざ笑うかのように叫ぶと周波数変換でどこかに行つたようだ。スワイフトとレイドの一人は揃つてため息を付くトリーダーの方を見た。

「どうするのよフーンリル。あの馬鹿アンドロメダの鍵を持つてどこに行たよ」

リーダー、フーンリルはスワイフトに問題ないと言いたげな様子で言った。

「俺たちの計画に勝手に入ってきたんだ。ほつとけばいいや。それに、鍵はあいつらに持つていかれてないしな」

「まあ、そうだしね。リミス、発信機ちゃんとつけてる？」

「気づかれてないはずだよ。それで、次はどうあるんですか？ 鍵の動力、負のエネルギーをためるために事を起さないと溜まりませんよ」

「各自それぞれ負のエネルギーを集めるのに行動してくれ」

フーンリルが言つと各自それぞれのパートナーのところに戻つた
ようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263w/>

流星のロックマン 連鎖する運命

2011年11月17日19時55分発行